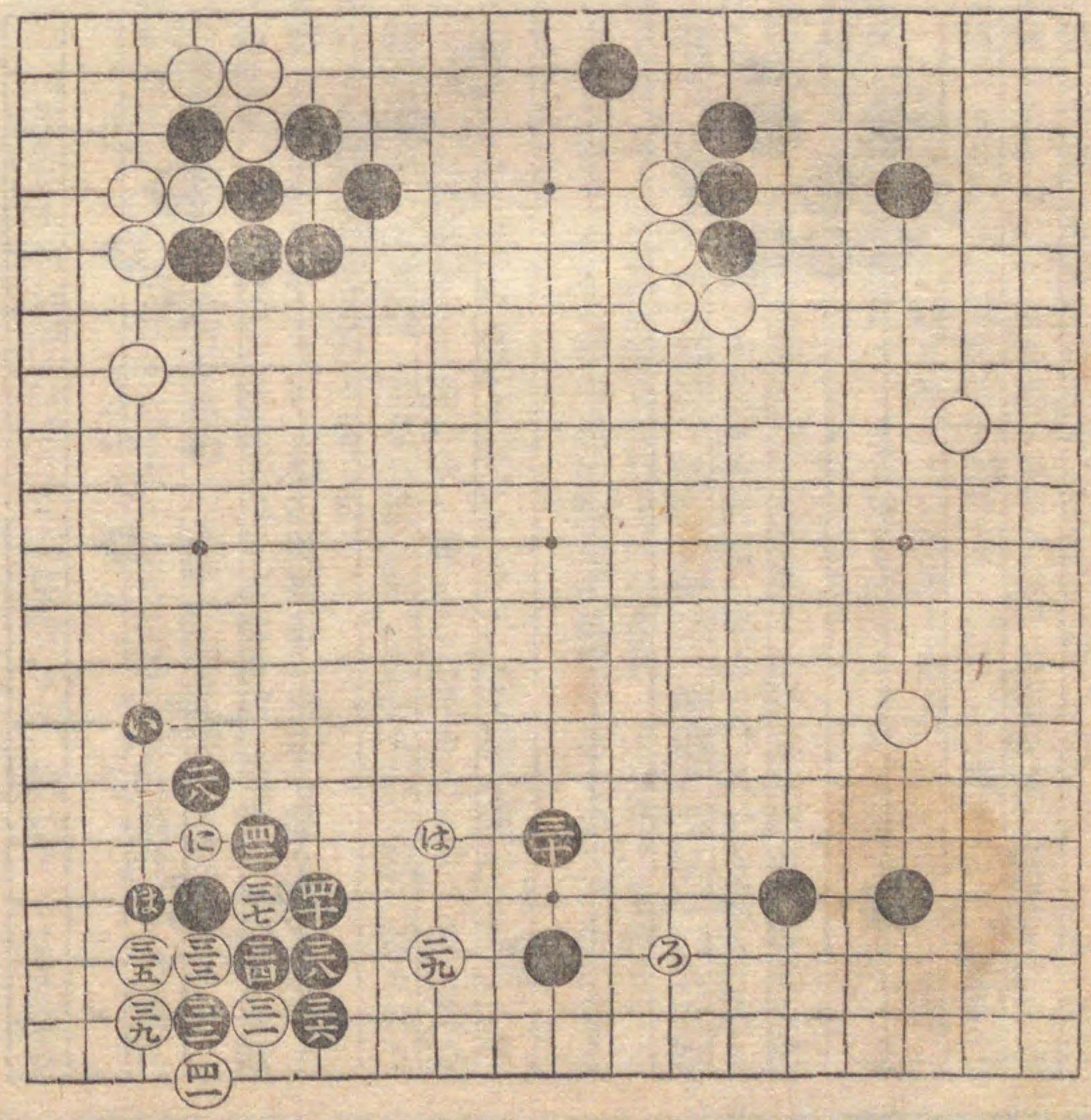


黒二十八は●と大斜走してもよい、白二十九は黒地を消し、兼ねて右方○の打込を覗ふ手である、黒二十は白○の打込を防ぎ、二十九に迫ると同時に暗に右側白地への打込を覗つて居る手である、

黒三十二は單に三十三と下つて居てもよい、其時白は○と一間飛する手である、

黒三十四は場合によつては三五の點に打ち白を三十四に粘がして三十九と粘ぐ手もあるが、此の場合白二十九と黒三十の交換があるから黒は此の利を全うするため此く振替はりを打つたのである。



「註」 白二十九と黒三十の交換が何故黒をして三十四以下の振替りを打たしめたかと言うと、黒三十四以下四十二迄の手順が白二十九、黒三十、の二子のない前に行はれたものとして此の處を見ると、今は何處へ打つかといふにヨモヤ二十九と死地に打つて黒を三十と飛ばせる氣遣ひはあるまい、して見ると此の二着の交換は白の不利たる事勿論である、即黒三十の飛がなければ白は何等か他に手段の施し方もいろいろあらうが、二十九と打つて其の代償として三十と打たれた以上此の處黒地向つて白は容易に手の下しやうもない有様となつた。

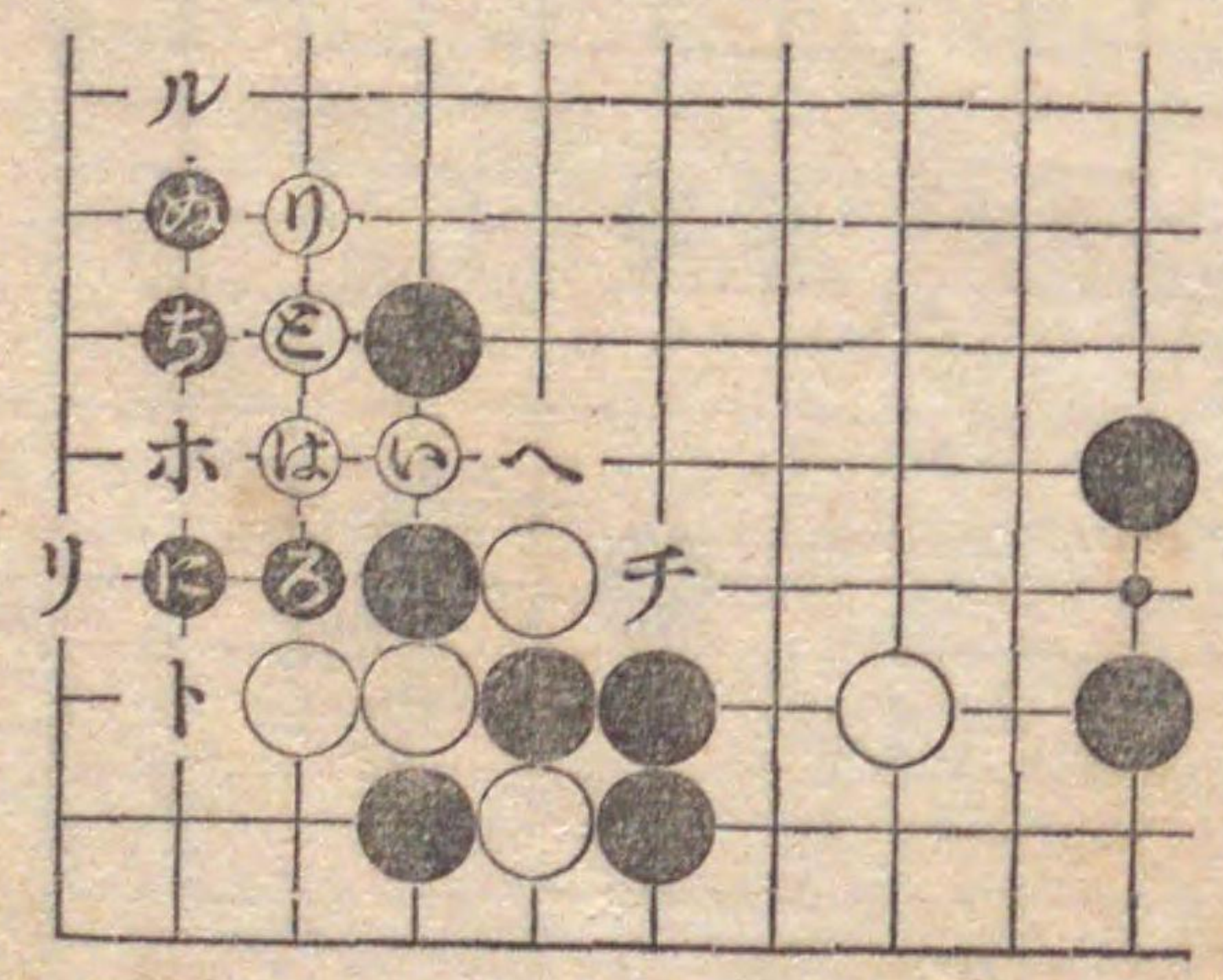
白二十九の手を○から打てば参考兩圖の様な結果になる。

△(参考圖の一) 白二十九の手で○、黒●、白○、黒●、白(ホ)

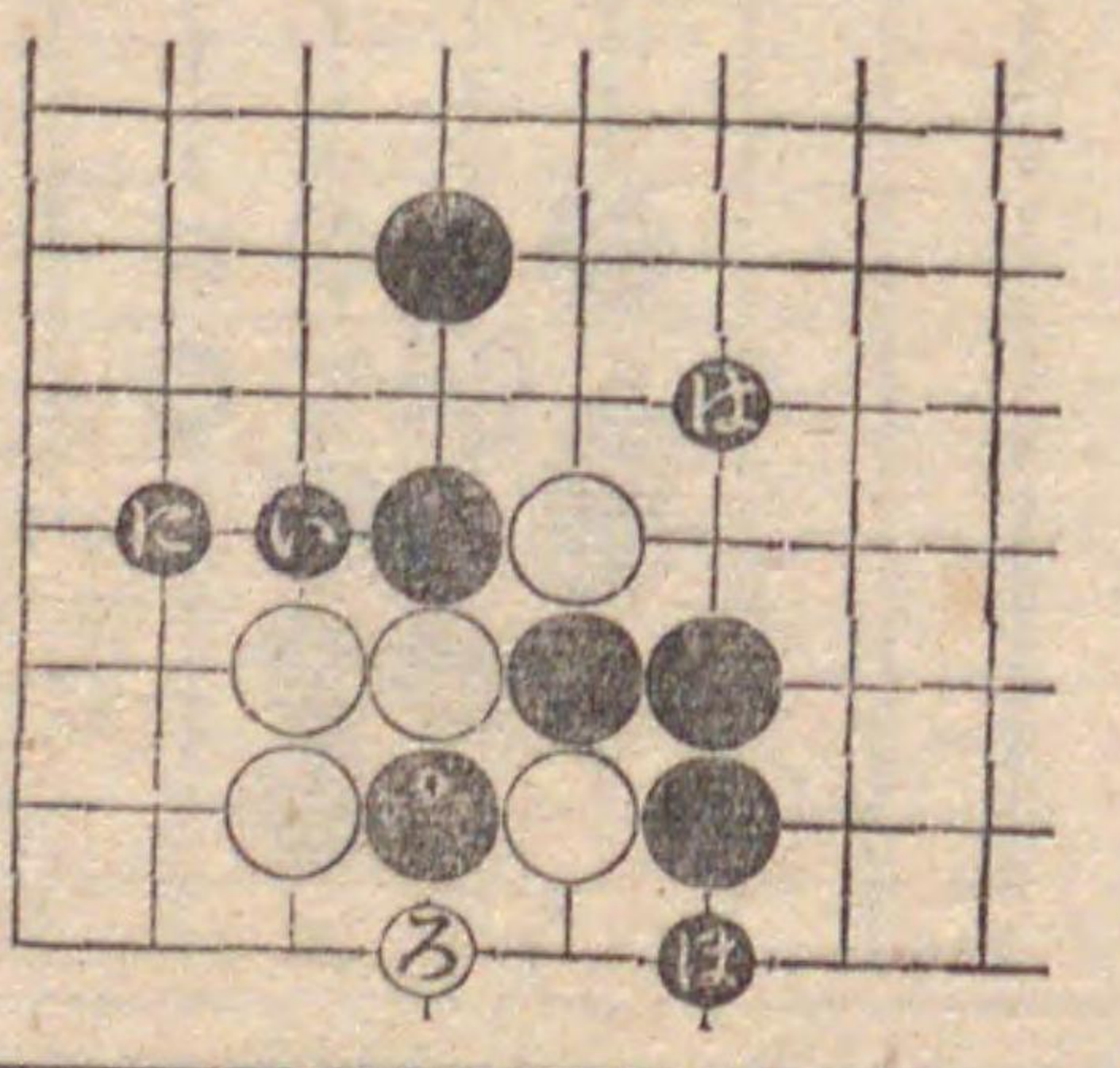
黒(へ)白(ト)黒(チ)白(リ)と盤る、又此の手順の中で白が(ホ)と抑へず此の手で(へ)と粘げば黒(ホ)と曲り、白○黒●白○黒●となつて白は(ル)と抑へる手が利かぬ。

△(参考圖の二) 黒四十と白を抱へる手で○と押せば白○と提り黒●と門する、此の形は後に黒から●の下りと○の下りを利かされる。

(圖一の考參)



(圖二の考參)



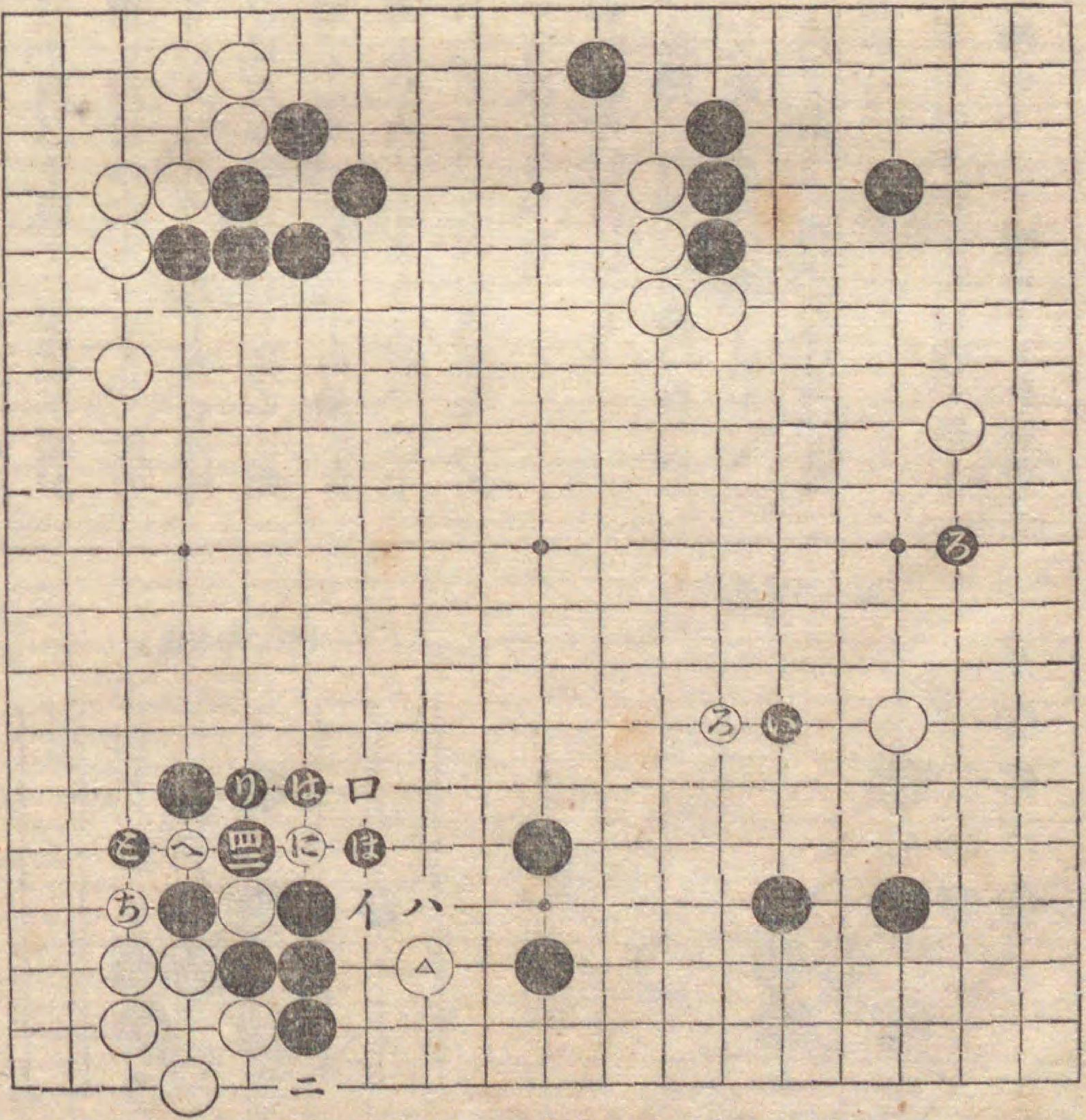
~~~~(局子三法石布)~~~~



本圖の後に於て白は⑧の邊に飛んで右側の我が模様を護ると同時に下側の黒地を幾分消さうといふ打方に出たい處である、又黒からいふと、⑨の邊に子を進め自分の地域を益々宏壯ならしむると同時に次で⑩の邊の打込を覗ふといふ手に運びたいのである。

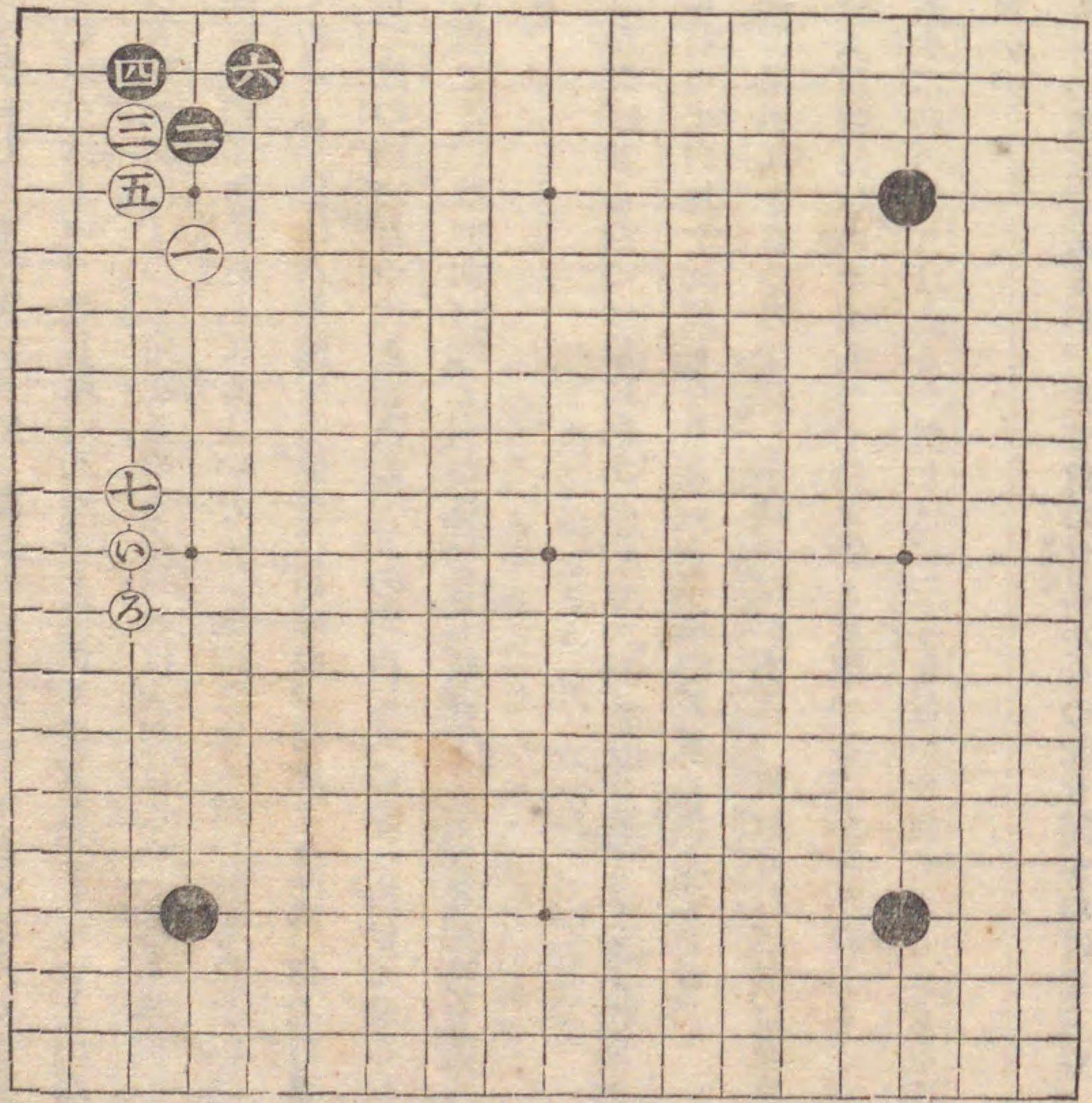
△問 黒四十二と打抜く手で⑩と打たば如何、

答 白四十二と出、黒⑪、白⑫、黒⑬、白⑭、黒⑮、白粘ぎ、次に黒は(イ)と(ロ)この截斷點の粘ぎ方に困るのである、若し(ハ)と粘ぎば後に(ニ)の綽まで利かされる事となつて折角初に交換で利を占めた△印白に十分活躍される事になつて面白くない。



三子第拾貳局

黒四の手を前局の様に手抜して七の點へ打つは場合の手である即ち本圖の通り四と下から綽ねるのが尋常の受け方である、次で白が五と引き、黒が六と掛粘ぐのは殆んど約束手と言つてよ、白が七と拓くのは、黒から此の點へ夾攻められるのを防いだ手である、但し此の七の手は或は⑧若くは⑨と廣く拓いても差支はなす。





黒八は若し外に急場がありとすれば手抜きしても差支はない、然し其の手抜きして打つ場所が普通一般の場所ならば、やはり八と打つておくがよい、然し此の八の手を黒が手抜きしても可いとか悪いとかいふ問題は、主として白七の着點如何によつて定まる事と心得れば大差はない、即ち本圖の様は白が七と狭く打つてをるから黒は八の手を手抜きしてもよいといふ道理になるが、若も白七が③若くは②の點に廣く拓いて居る時であると、黒は八の點を手抜きは出来ぬ、何故なれば、白七の手を③若くは②と拓き、黒八を手抜きして他の點に打つたと假定し、其の際白に八の點へ掛けて來られたならば、黒は②と應じるより外に途なく、次て白に④と引かれたならば非常に宏壯な形勢を造られるといふ不利益を醸すからである、

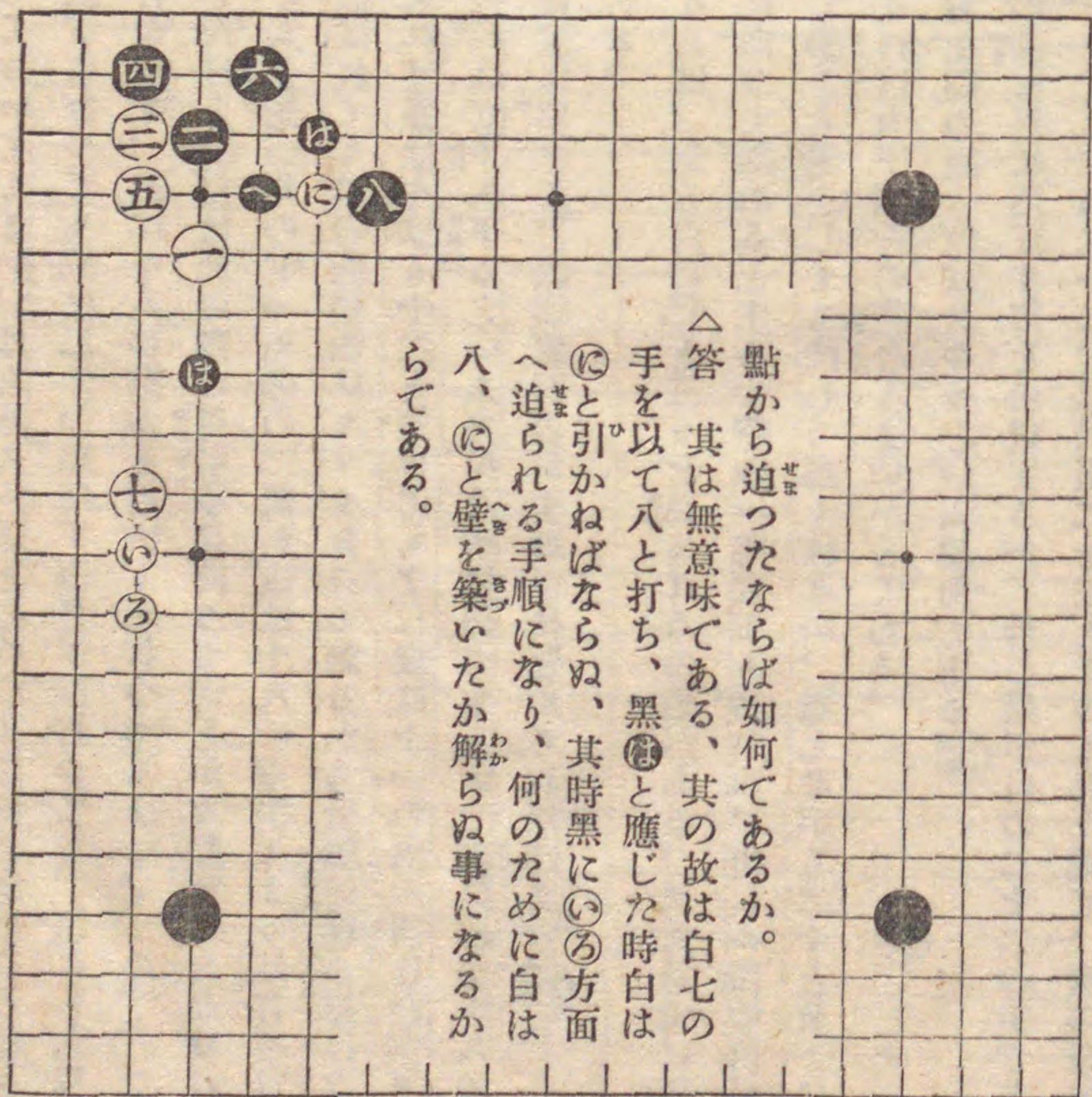
又此の白七が廣い場合に黒が八と打たねばならぬのは單に白から掛ける手を拒ぐといふ消極的の意味ばかりでなく、次て⑤の點に打つて白地を蹂躪しやうといふ積極的の意も含んでをる。

「註」 白七が本圖の様に狭い場合に黒が八と打つのは少し不利の傾がある、何故なれば其は單に白から⑥と迫られるのを防ぐといふ防禦だけの手であつて白を⑦と攻撃する手が利かぬからである此く此の一部分だけで言へば多少不利の傾はあるが然し已に三子を置いた棋であるから堅固に此く打つても決して悪い事はなからぬ、

以上は黒八の手と白七の手の廣狭との關係であるが、次て白の立場からの説を聞かねばならぬ。

黒が八の手を手抜した時、白は如何打てばよいかといふと、八の點と⑤の點との二ヶ所打ち場所がある、然らば如何なる時に八と打ち、又如何なる時に⑤から打つかといへば、前にも黒八の手で説いた通り七の手の拓きが③若くは②と廣い時は八から掛けるのであるが、若本圖の様に白七が狭く堅固に拓いてある場合は、白は⑤の點に打つて黒を⑥へ迫り出す方針を取るのがよいのである。

△問 然らば溯つて白七の手で黒の八と備へをせぬ先きに八の



點から迫つたならば如何であるか。  
 △答 其は無意味である、其の故は白七の手を以て八と打ち、黒⑤と應じた時白は⑥と引かねばならぬ、其時黒に⑦の方面へ迫られる手順になり、何のために白は八、⑥と壁を築いたか解らぬ事になるからである。

~~~~(局子三法石布)~~~~

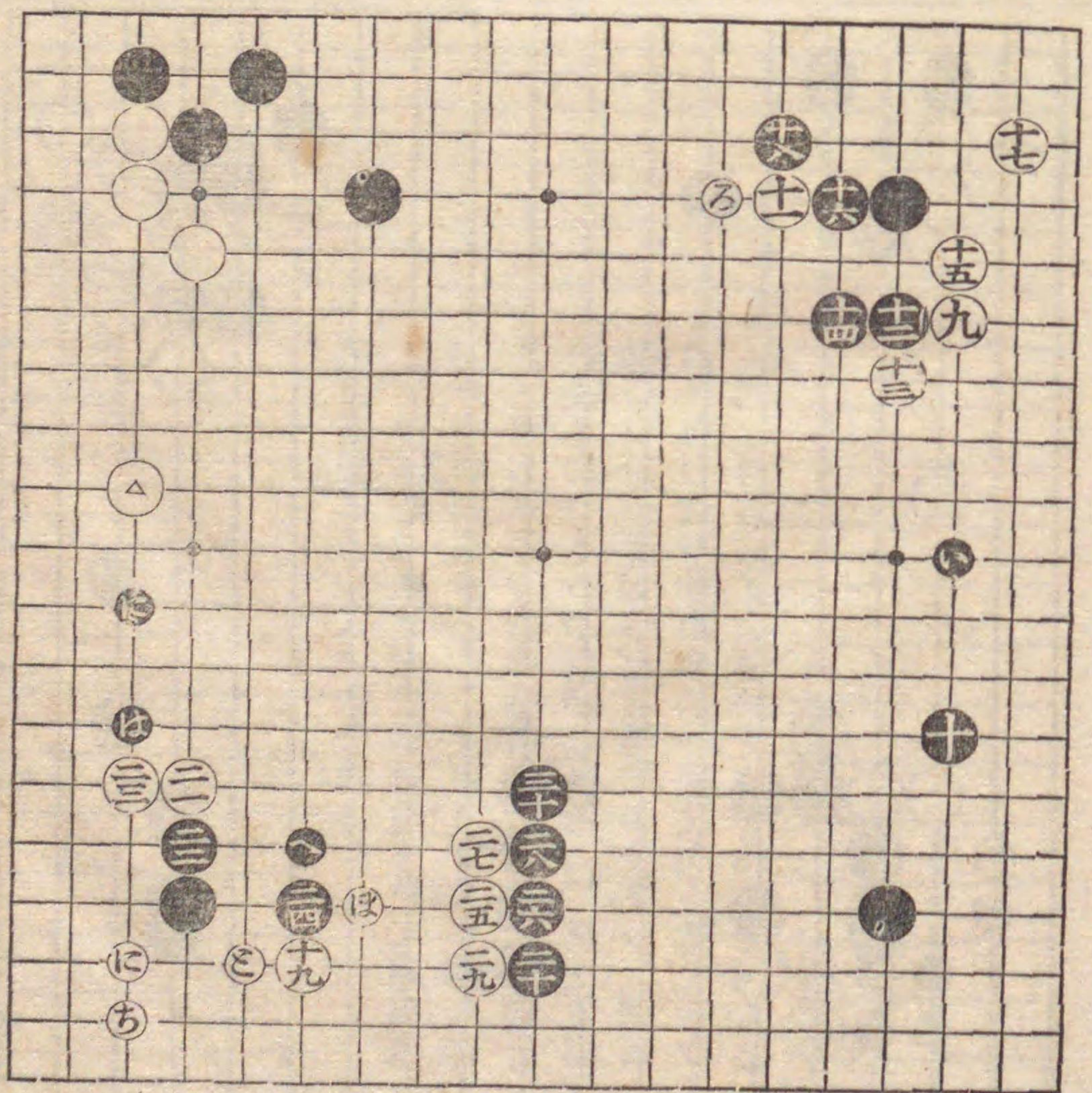

黒十の手は普通に十一と單關に應じておいてもよい、即ち八の一子と相待つて上邊に宏壯な模様が出来る、又此の十の手で●と右側星下に打つても或は二十の點即下側星下に打つても、何れも大場である、白十一は○と二間高掛に打つても、或は十八の點から兩掛りと打つてもよい。

「註」 黒が十の一手を茲に手抜した以上、白は此の隅の黒勢子に向つて何とか攻撃を加へなければならぬ、さて白の打ち場所といふと先づ此の十一か○の二間か或は十八の兩掛りより外打つ可き點はない、此の三者の何れを撰ばれても黒の應接法はキマリきつて居るから何等紛れる患はない、即ち白が十一の手を○から來れば黒はやはり十二と頂けてもよし或は十一の點へ頂け白が下から縛ねれば上へ伸び、上から押へれば下へ下るといふ自由な手に出てもよい、若又白が十八の點へ兩掛に來たならば何れかへ任意に頂けて、置棋定石の示す通りに運んであげばよい。

黒二十は機誼に稱うた大場の手である。
「註」 若此の手で●と大斜したならば、忽ち白に○と三々を犯されるの恐がある、又大斜走に拓いた●の點から、白七(△印白)に向つて詰めるとするも●の間飛より利かぬ、但し△印の白が無い場合であれば白十九に應じて●と大斜走しても決して悪くはない、然しながら二十と星下に打つた方がやはり大きい、何故なれば右下隅との衝合もよいからである。

白二十一は黒に二十四と頂けさせ右上隅の通り運ばせやうといふ趣向である。
「註」 何故白は此の處を右上隅の様な形に運ばす事を希望するか、若し黒が白の二十二の手で二十四と頂け、白○と縛ね、黒●と行ひ、白○、黒二十二、白○、黒二十三となつて見た處で、黒の發展

地は△印白によつて制限されて居るから餘り芳ばしくはない、其の上白に右下隅へ先鞭をつけられるから黒二十二の手で二十四と頂けるのは、白の策にハマル譯である。
白二十五は先づ○と縛ねておき黒に●と行ひさせた後、二十五以下の手順を運んでもよい譯であるが、茲て黒に●と行ひられると多少其の響きは左側に感じを及ぼす恐もある、とモ一つは後に隅を打つ時の爲め味を残したのである。

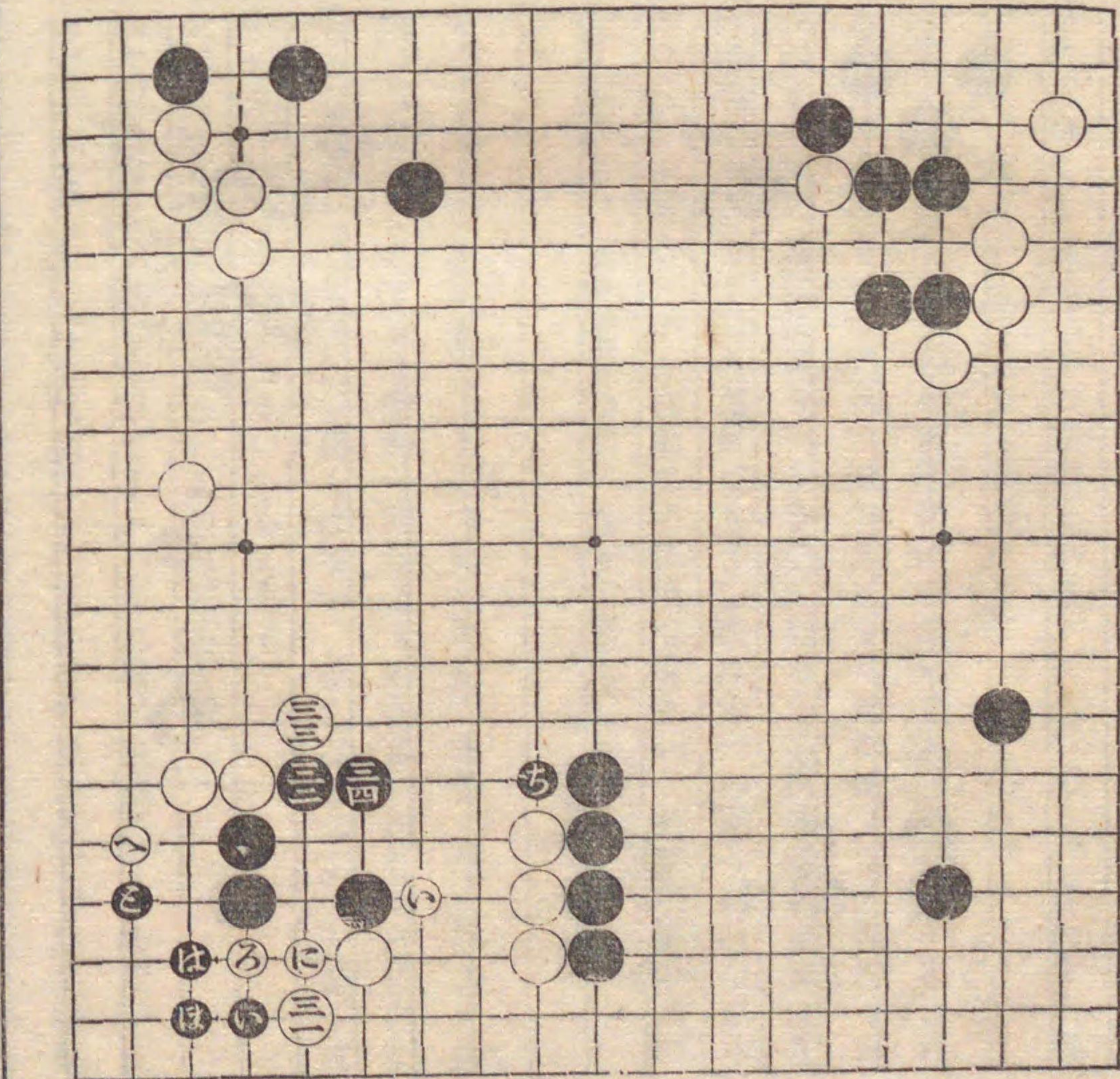


（局子三法石布）

白三十一の時、黒が●と頂けると、白に○と冲まれ黒●、白○、黒●白○、黒●となつて次に白に三十四と打たれると左側の白地は極めて宏壯を加へるばかりでなく隅の黒にはまだ活がないのである。

「註」最初白が○と縛ねずにあけば此ういふいろゝの味が残るの利がある。

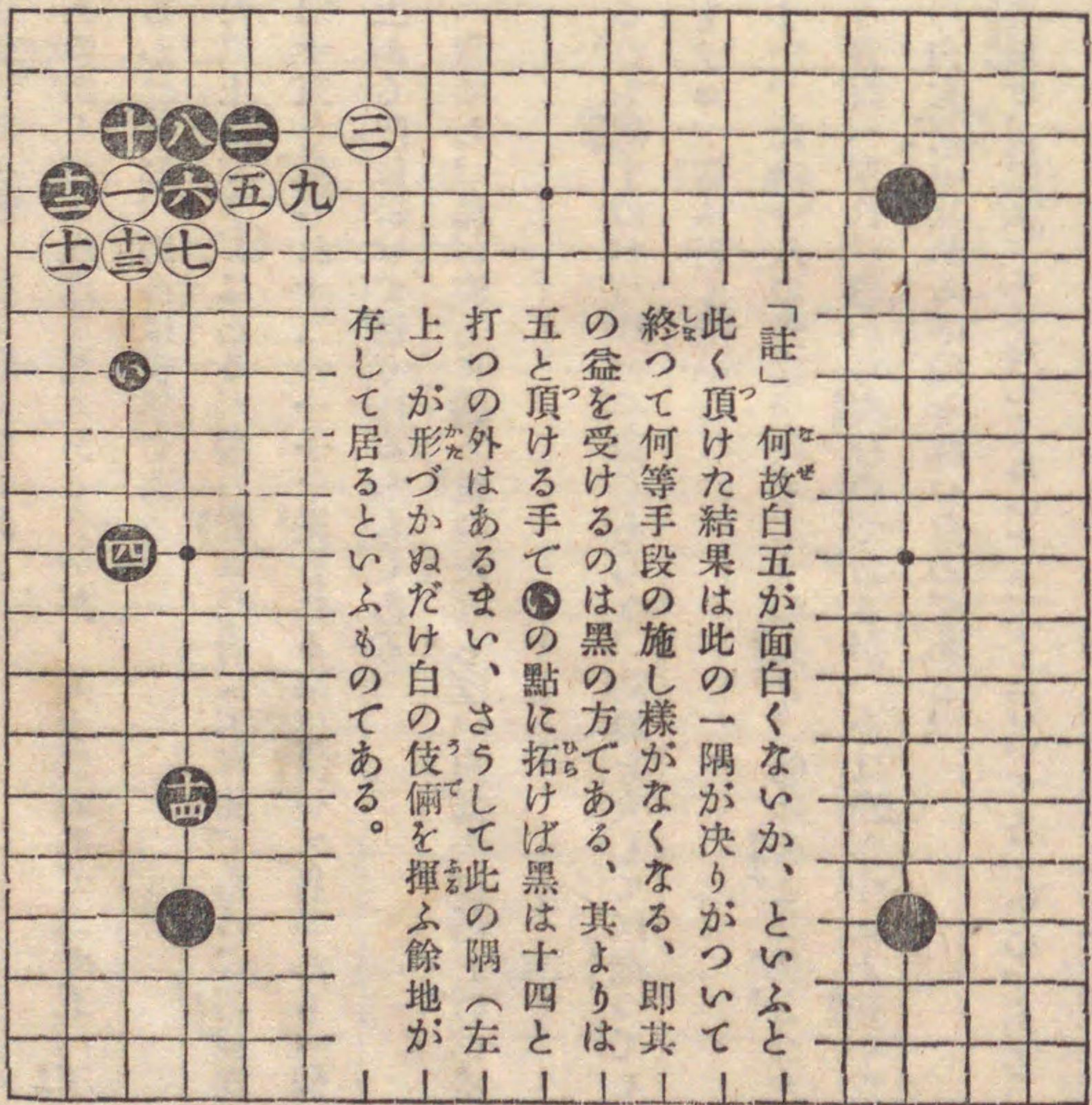
本圖の後、白が三十五の手で若し●と三々を犯して来たならば黒は之に關せずして直ちに●と曲り以て白三子の頭を包み自己の連絡を計つてあけばよい。



三子第十三局

黒四は從來屢々其の例を示した●の二間夾返しにする方が棋の形が紛れなくて良し。

「註」黒四は悪い手といふ譯ではない、考のある手で、振替つて一手で黒二を提りキラレルのを嫌つた意がある、然し此に比較すると●に夾返す方が結果が分り易く打ちよくなるから黒の立場としては其の方がよい、といふのである。白五は面白くない、此の手は●の點に二間に拓いておく方が白の手としては適應してゐる。



「註」何故白五が面白くないか、といふと此く頂けた結果は此の一隅が決りがついて終つて何等手段の施し様がなくなる、即其の益を受けるのは黒の方である、其よりは五と頂ける手で●の點に拓けば黒は十四と打つの外はあるまい、さうして此の隅(左上)が形づかぬだけ白の伎倆を揮ふ餘地が存して居るといふものである。

黒十二の手を二十五の點に下るのもよい、其は○の截を覗ふ手である。

「註」 是亦一間夾定石に詳説してあるから茲に繰返す要もあるまいが、黒十二の手で二十五へ下つておけば、白を○と截る手が残るかはりに、即今は後手である。

一旦十二とアテ白に十三と粘がせた以上は先手ではあるが○の截は絶対に不可能である、何故なれば本圖の結果は何時でも白から二十五と截られ十二の一子を提られる事に決つて居るから、假令い黒が○と截つても白に(イ)と上から門に掛けて捕られるからである。

黒十二の手を二十五と下り、白他へ着手し、黒が直ちに○と截つたならば、白は先づ○と行びるより外はあるまい、

要するに此の○と截る味を保留して打ち廻すのが巧妙の手段であらう、時機を失しては截つても其の効があるまい、又餘り早くてもサホド得も行くまい。

黒十八は○と下側星下に夾返してもよい、此の十八の飛は、次で二十の夾と、○の夾とを見合つた手である、即ち十九の手で白が○の方面へ來れば○から夾むのであるが、今は白が十九と拓いたから二十と大場を占めて兼ねて十五の白を夾み攻める手段を採つたのである、

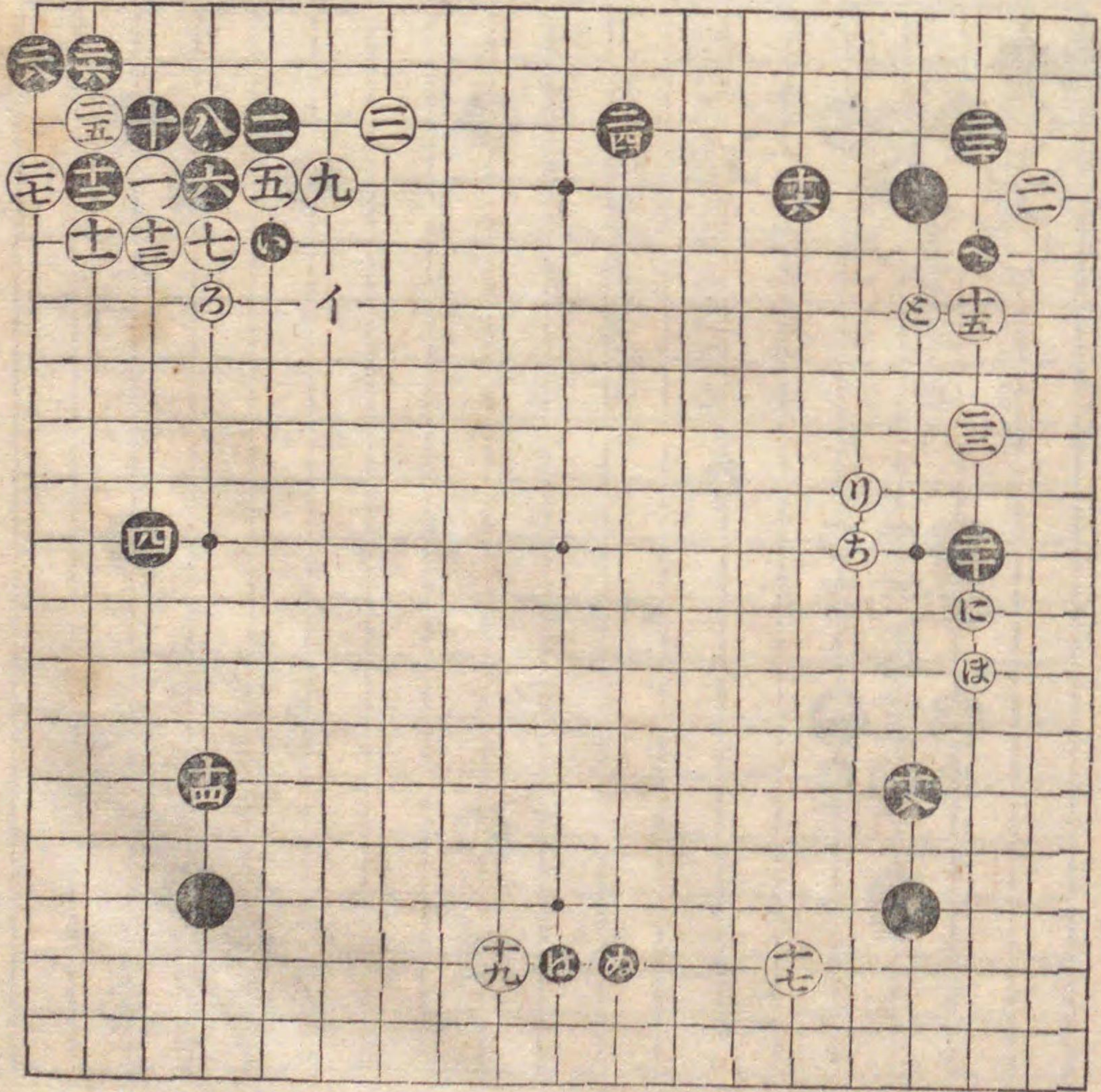
此の黒二十の手は或は先づ一着○と尖頂け、白を○と立たして○と打つてもよいのである、然し右上に十五、○と白の勢力が加はると今度は黒二十の頭へ○若くは○と臨まれる様な手順が出

來る、

白二十一は黒から○と尖頂けられ○と立つた時黒に○の點へ單關されるを豫防したのである、白二十三は同じく黒に此の點へ一間に詰られるのを豫防した手である、

黒二十四は此の場合に於ける大場である、若し此の手で下側を打つ考ならば○と打込むのが酷しい手である、

白二十五の截提以下黒二十八迄は何時打つても可い手で、必しも今打たねばならぬといふ時機問題の手ではない。



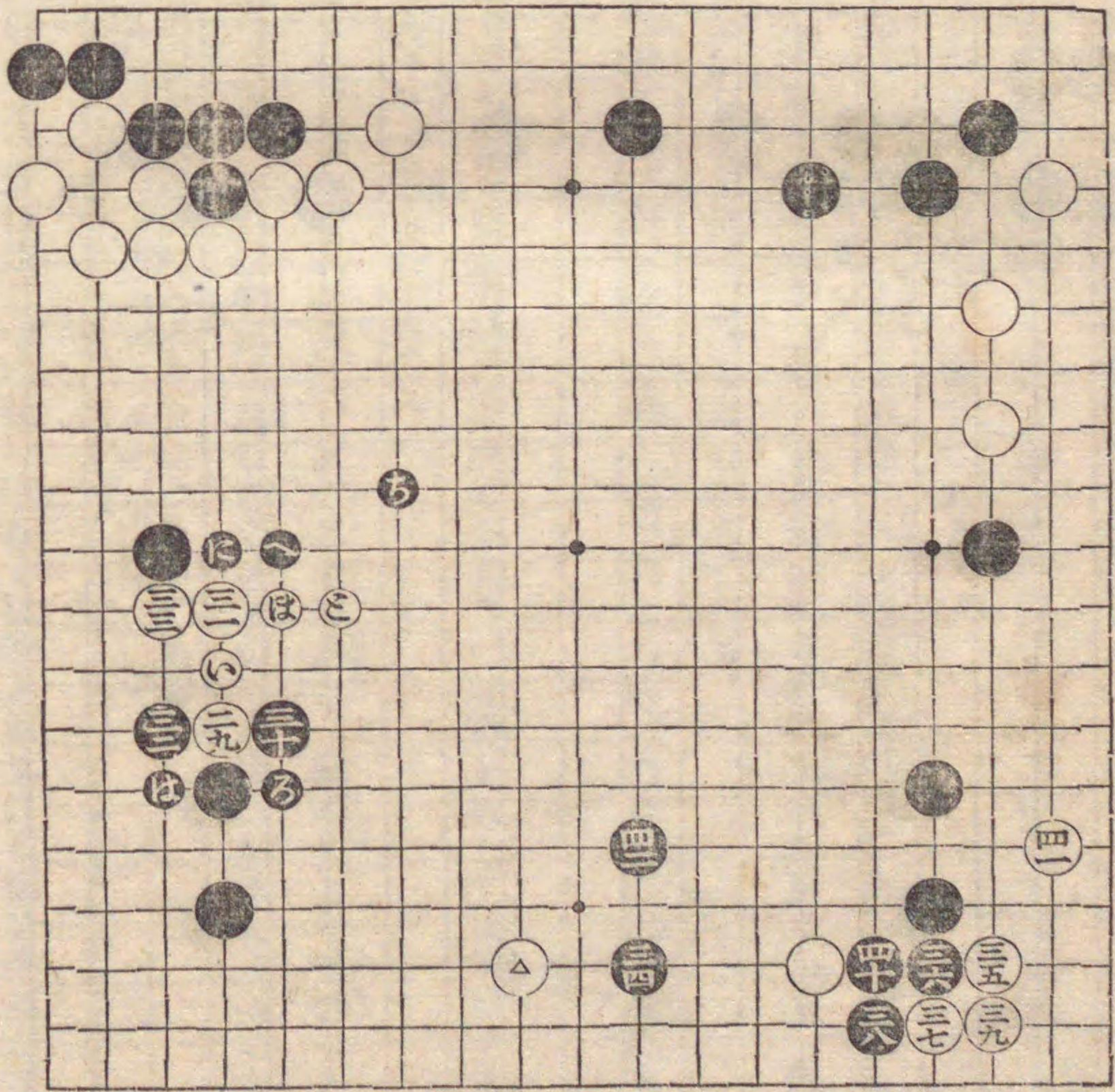
(局子三法石布)

白が三十一の手で㊦と行びたならば、黒は㊧と粘いてもよし又は㊨と下つてもよし。

「註」 白二十九に對する黒の應接は次頁に參考圖を以て詳示する事としやう。

白が三十一と飛んだのは黒を兩斷する手である、若し二十九の手で三十一と打てば黒に三十三の點へ掬はれて盤られる。

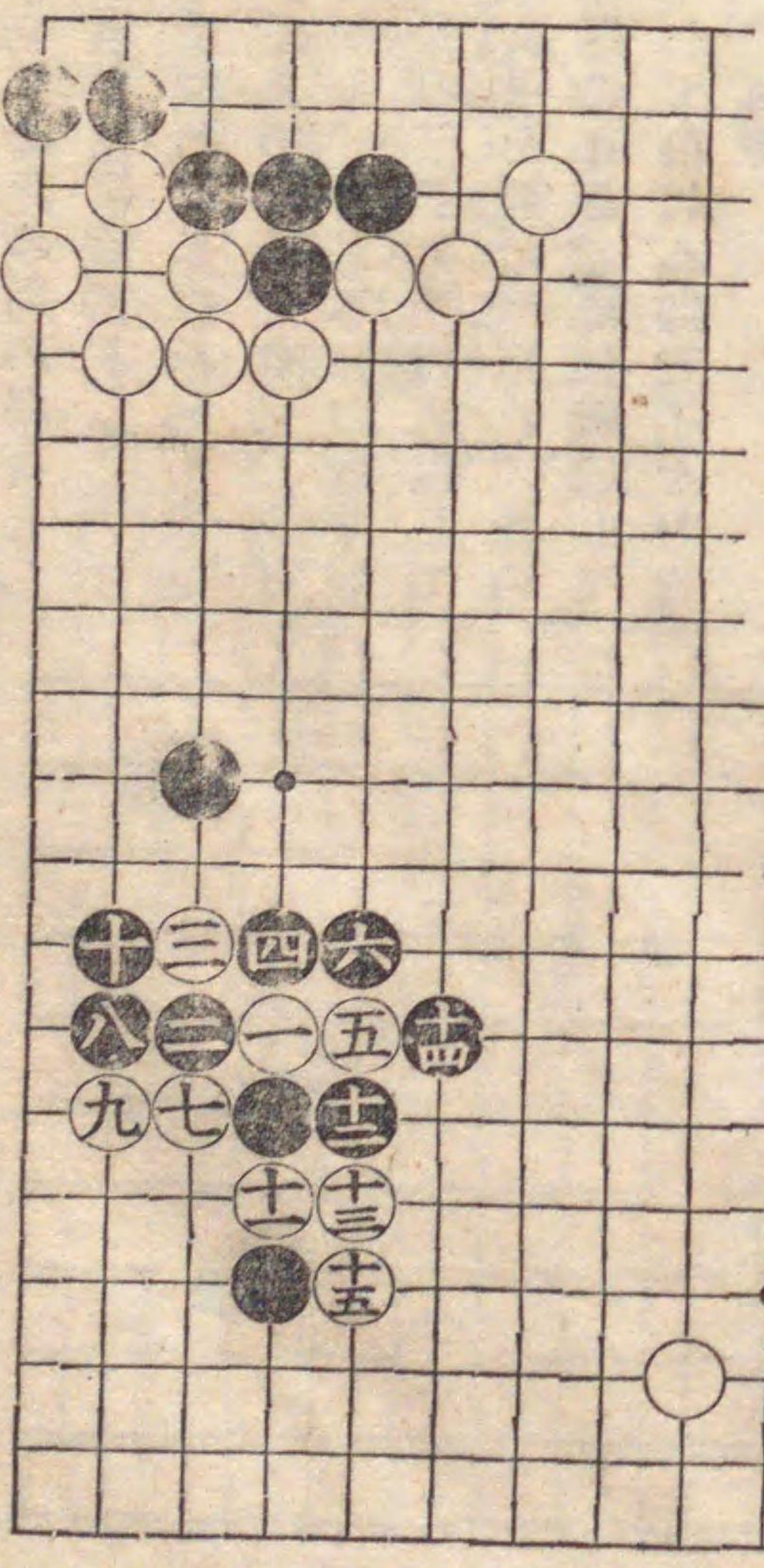
黒三十四で㊩と立ち、白㊪、黒㊫、白㊬、黒㊭、と運んでもよい、既に三十、三十二と此の隅が堅固になつた爲め此く三十四と猛烈に打込みをした、



白三十五は黒から四十へ尖頂られるのを嫌うて機先を制して此く隅へ振替つたのである、既に四十二と單關され、左右共堅固になつた黒の間に介在する△印白一子は頗る孤弱の位地に陥る事となつた。

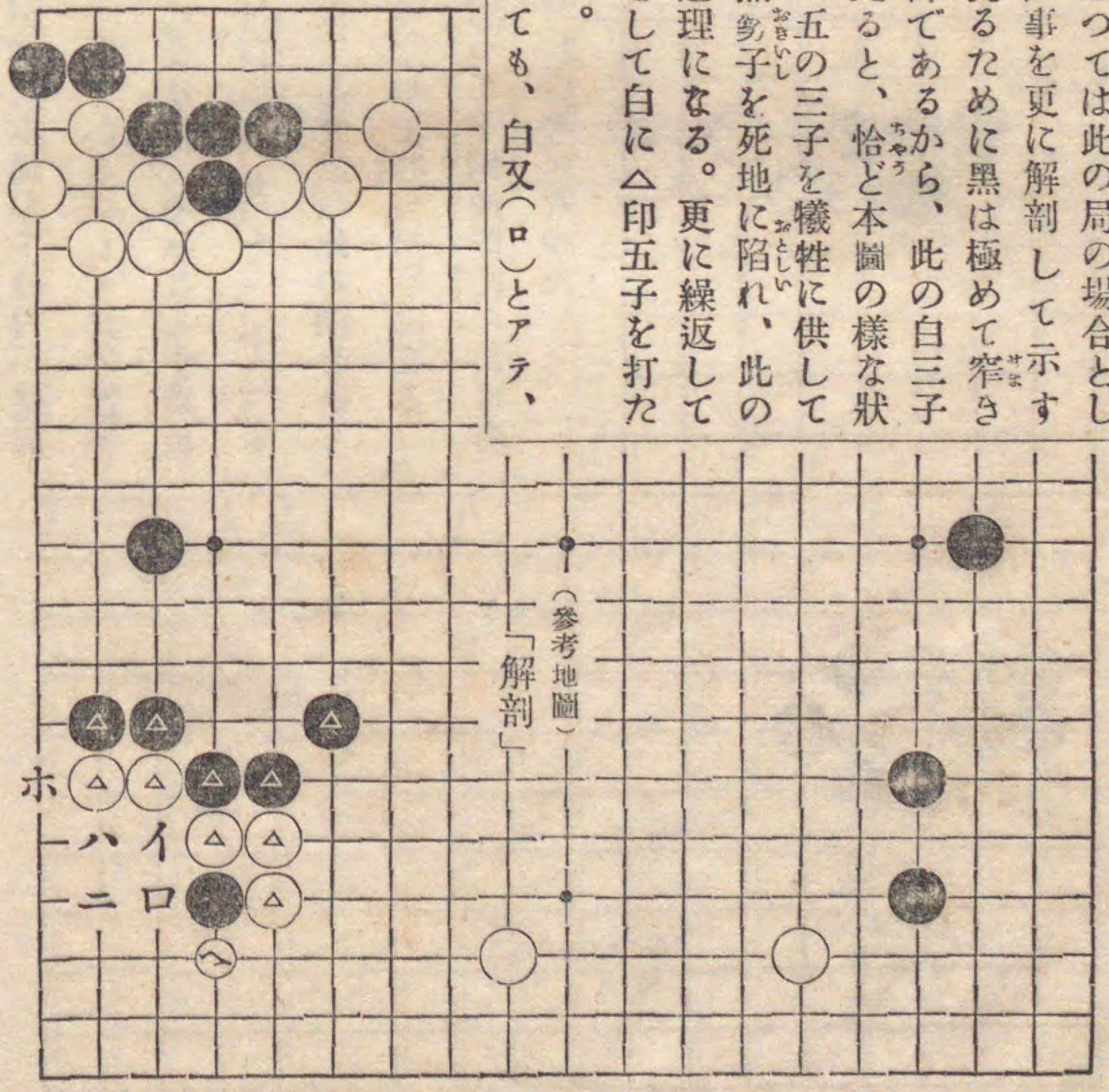
▲「參考天圖」 前圖白二十九の頂に對する黒の應手の可否を示さう、此く黒が下から行のは全く無い手ではないが、専門家は之を「素人筋」と稱してアマリ好まぬ手である、乃て本圖の様な手順に運んで三及び一、五の白が打抜かれた結果、此の中側の黒は強烈無比の形にはなつた、

が然し本局左上の白が堅固であるから毫しも其の影響は受けぬ、のみならず爲めに白は七、九、十一、十三、十五、と運んで、此の隅を全く蹂躪して終つた事になる、随つて下側四間拓の白は非常に優勢になつた。



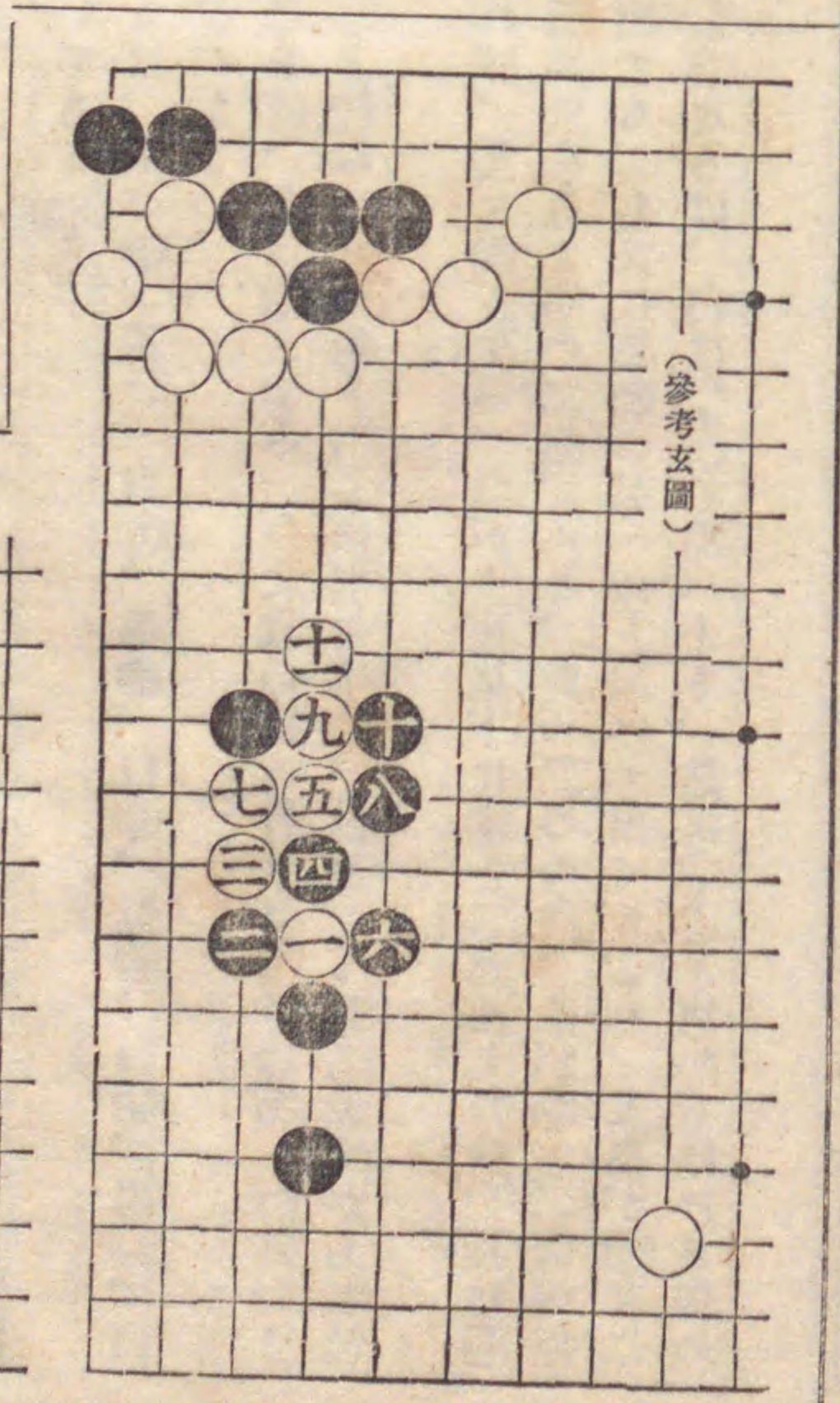
▲(参考地圖) 前圖の様な結果になつては此の局の場合としては非常に黒の不利であるといふ事を更に解剖して示すと、前圖の白一、三、五の三子を提るために黒は極めて窄き場所へ四、六、十の三着を費した譯であるから、此の白三子と黒三子とは相殺して取り除けて見ると、恰ど本圖の様な状態になる、して見ると白は一、三、五の三子を犠牲に供して△印五子の障壁を築いて、左下隅黒勢子を死地に陥れ、此の一隅を全く占領して終つたといふ道理になる。更に繰返して言ふと黒は△印の五子を打つ代償として白に△印五子を打たせて隅を占領されたといふ事になる。

次て黒が若し(イ)と戴つて來たとしても、白又(ロ)とアテ、黒(ハ)白(ニ)黒(ホ)と二子を提れば、白亦(ヘ)と黒一子を抜くから、黒の二子提は單に二子だけの價値よりなかに反し、白は益々強盛になつて下側大拓の白地に向つては黒から何とも手の下し様なくなるのである。



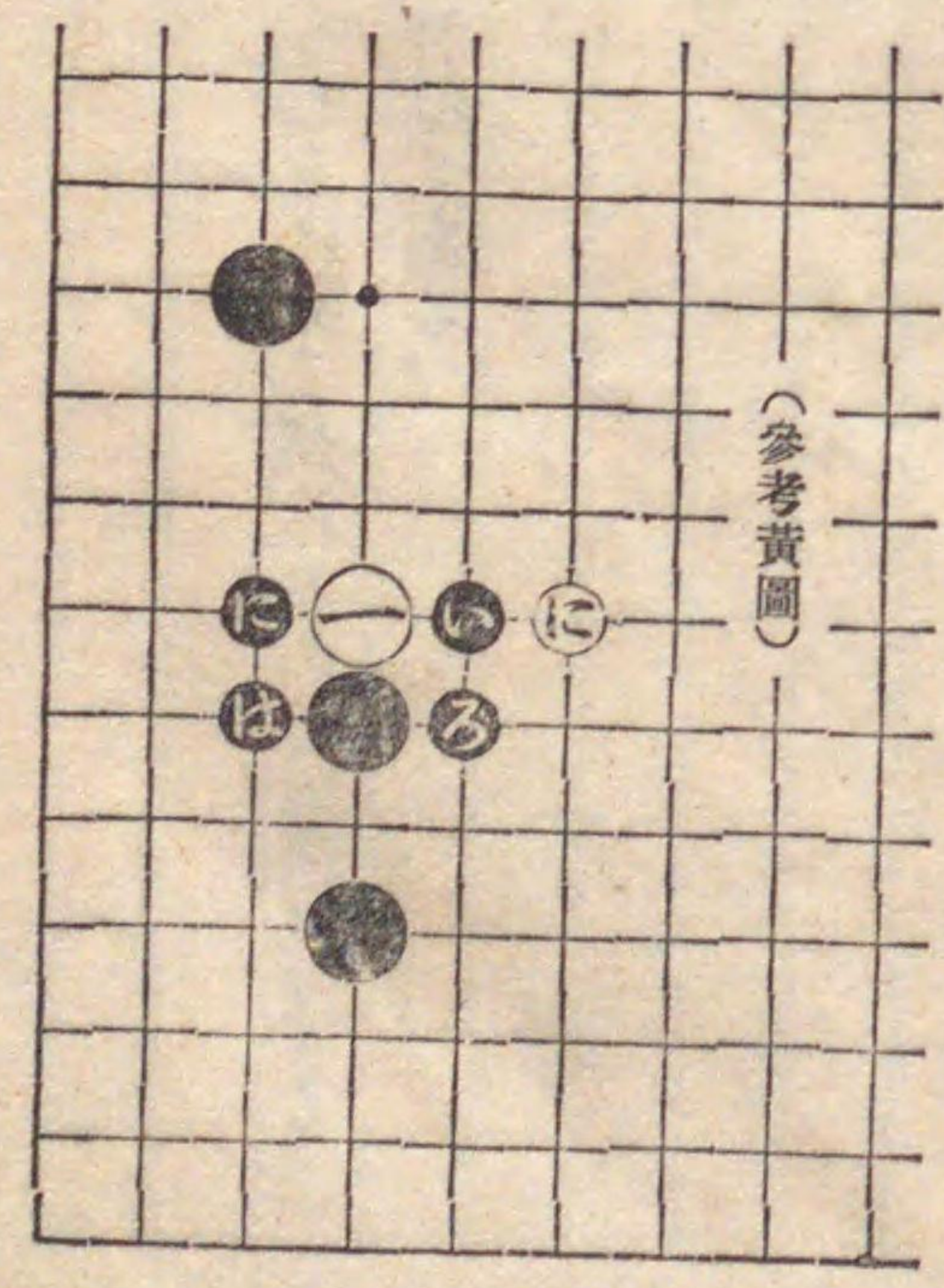
(参考地圖) 解剖

▲(参考玄圖) 本局の様な場合でなく(下側の白地が治つた後)て若し此の左下隅の黒が堅固強大になつても附近の白が其の影響を受けぬと言つた様な場合)單に此の左側及左上だけの損得から言へば、白は本圖の様に一の子を捨て、此く打つても少からぬ利益である。



(参考玄圖)

▲(参考黃圖) 要するに(場合による事は勿論なれど)白一の頂に對しては、黒は上からと下へ下るは或は上へと立つが本手である、と下へ下るはと下から行くのと彷彿たる手であつて、若し此の際黒がと下れば、白はと上へ飛ぶ、次て黒が下から低く盤る手は、最初高く一間飛した手と矛盾する事になつて甚だ拙劣といはねばならぬ。



(参考黃圖)

三子第十四局

黒二は高目に⑤と掛り、白二、黒⑥、白⑦、黒⑧となつても右上に勢子があるから均衡は悪くない然し本圖の様に小目に打つ方が此の一隅としては確に黒の利益である、白三の打方はいろ／＼ある、

(一) ④と大斜走掛をしてもよし

(二) ④と一間に夾んでもよし

(三) ④と二間に夾んでもよし

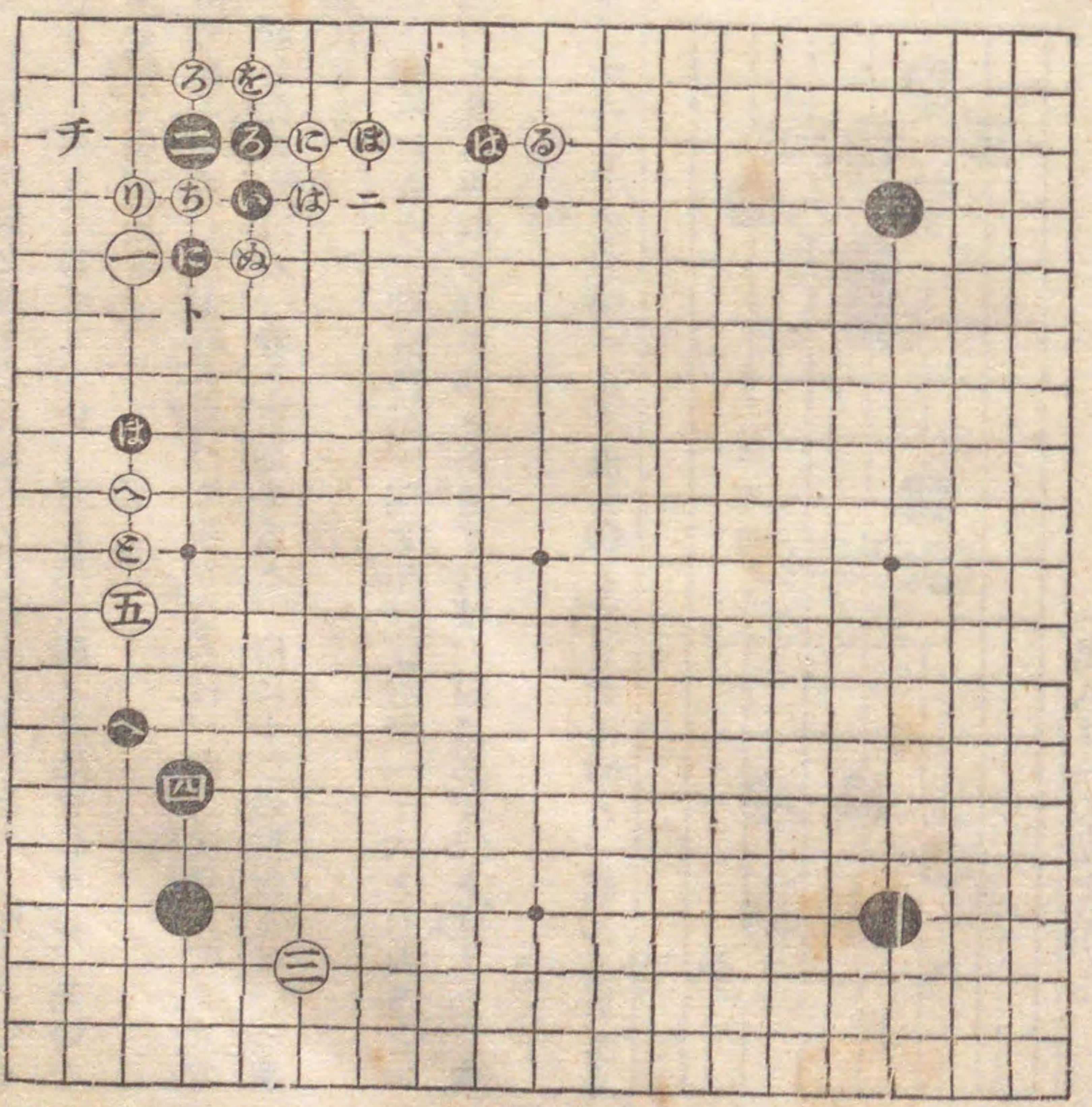
(四) 或は單に④若くは⑤と拓いてもよし

△白三の手で④に大斜掛をしたならば、黒は⑥と頂け、白⑦、黒⑧、白⑨、黒⑩、白⑪、黒⑫、白⑬、黒⑭と運ぶ普通の定石に打つがよい。

△白若し三の手で④と一間夾したならば、黒は⑥と尖み、白に⑦の點へ押させて⑧の點へ行くがよい、白⑨の頭へ⑩と頂け白に⑪と縛ねさせて⑫と引く頂引の手は、白をして打ち易すからしめるだけ黒の不利である。

△白若し三の手を④と二間夾にすれば、黒は⑥と尖み、白が上側星下に⑦と二間拓した時、黒は⑧と二間に夾返すか或は⑨の點に三間に夾返すかの二途である、此の二つの内、黒が⑩と二間夾返しをすれば、白は⑪と尖んで出てもよし又は黒⑫の鼻へ⑬と頂けて出てもよし、又黒が⑭に二間に夾返さず⑮に三間夾返しをしたならば、白は⑯の點へ走り、黒は⑰と肩から掛ける例の定石に運ぶのである。

△白若し三の手で單に④或は⑤と拓いたならば(互先の場合ならば黒は手抜するのであるが本圖三子の局であるから)黒は⑥と尖むとも又は④へ斜走して居てもよし。
抑々白が本圖の様に三と左下隅へ掛つたのは、黒に四と飛ばして五と打つ手順を自然に造り出さうとの意である、即白五は左上一からの拓きを兼ねて、黒に⑥の點へ三間夾されるを拒いだ好着手である、其故黒四が若も低く⑦と大斜走であれば白五は必しも打たぬ何故なれば⑥の低い位置から⑥の夾は黒も爲にくい處であるから白亦之に備へるに及ばぬといふ趣がある。



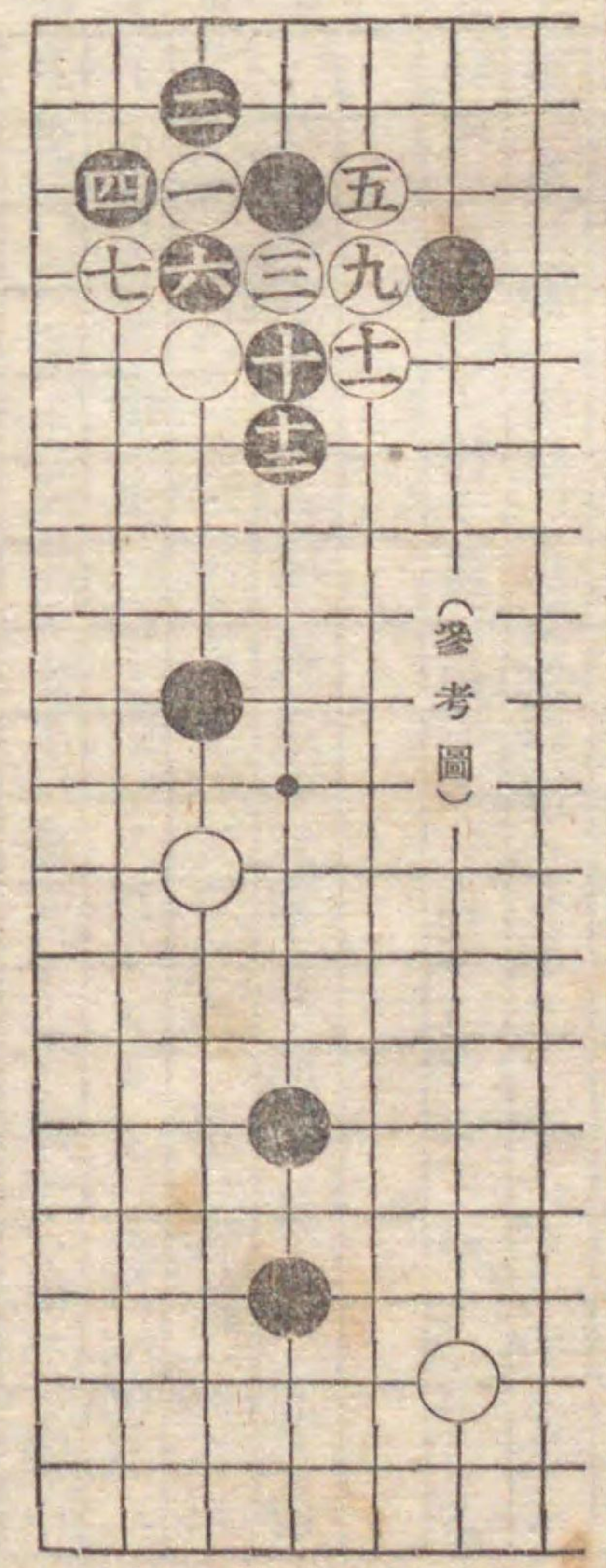
(局子三法石布)

黒六が若し(イ)の尖なれば、白は(ロ)と自ら防備を施すの外はない、白七の頂は黒から●と打込まれる手の凌ぎ手である、が或は單に(ワ)と圍うてゐてもよい、若し黒に●と打込まれた後、此の七の手を打つと「参考圖」の様な不結果を招く恐がある。

黒十二は右上勢子との均衡上好位置である、若し白が●と掛つて來たならば、●と尖頂け●と立たして三十と飛ばうといふ意である、若し此の十二の一着を閑却すると、白に十二の點若くは●の邊へ迫られて左上の黒が攻められる形になる、

黒十四は白が●と右側へ拓けば●と下側へ打たう、若又白が下側を拓けば右側へ十六と打たうといふ二途を見合つて居る手である、随つて此の十四を低く●と斜走すれば、白は必ず●と拓くか、或は直ちに●と右上へ掛るかである、

白十七は●の打込を拒いだ手である、此の手で●と隅へ走り黒を●と尖ませて●と一間して居てもよい、白若し十九の手で●と隅へ走つたならば、黒は十三の肩へ●と壓し、白●、黒●、白●の點へ尖んだ時、右上●の點へ單關するか、若くは●と白十七の頭へ冠して●の打込を覗ふかの二途である。



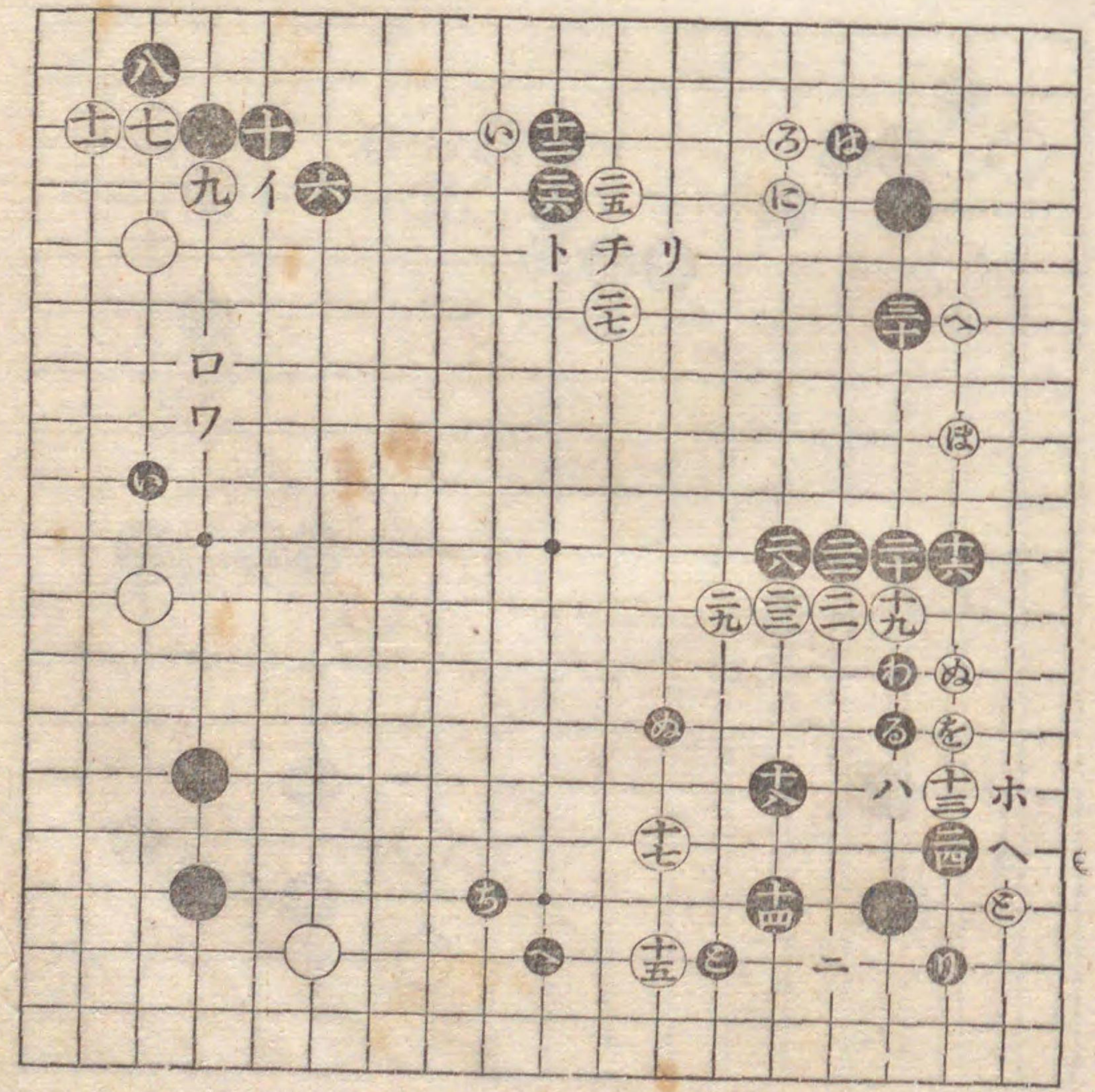
(参考圖)

(黒八は一の點を粘ぐ)

黒二十四は已に白十九以下二十三迄旺盛なる勢力が附近に出來た、め之に備へて根據を造る意である、乃て白が若し(ハ)と立てば黒は(ニ)と備へるが確である、若又白(ハ)と立たず(ホ)と下れば(ヘ)と沿うて下つて居ても決して悪くはない、

白二十五は先づ我勢力の近い方面から軽く敵地を侵略する手である。

黒三十の手で(ト)と行るか或は(チ)と緯込み白(リ)黒(ト)と打つかすれば白に三十の邊から迫られ多少棋が紛れる惧がある。



(局子三法石布)

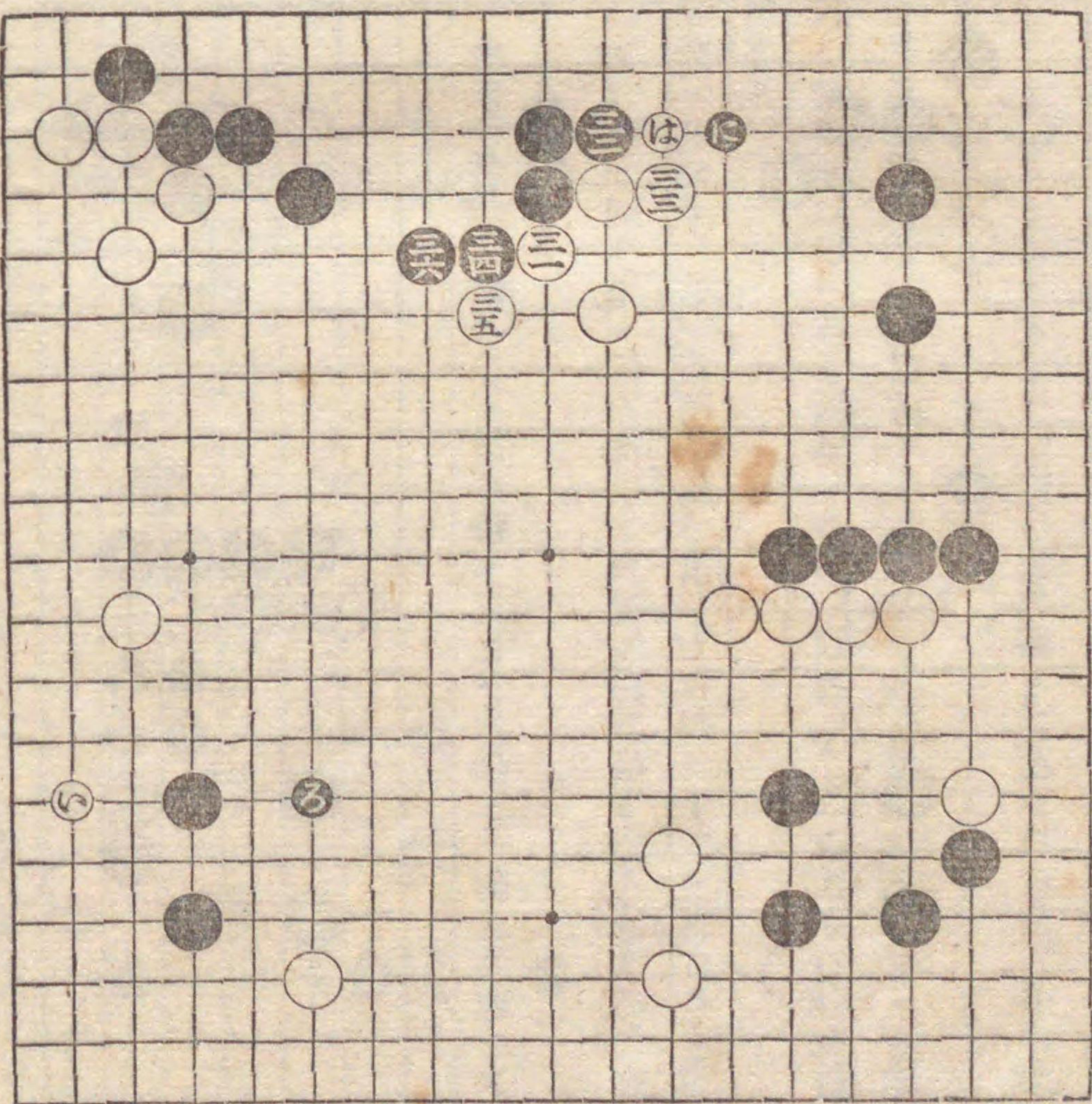
黒三十二の手で三十四へ縛ねると、白三十五黒三十六の交換の後白から三十二の點へ押へ込まれて、黒二子が「ダメツマリ」になると共に、右上隅へも不利の影響をうける。

〔註〕一着手順の前後を誤ると利害に雲泥の差を來たす。

白三十七の手を想像すると、左下へ㊦と走る位のもの、黒は之に應じて㊧と打つなどは軽い捌き方であらう。

△問 白より㊨に抑へる手の大小如何。

▲答 右上三々に打込ある故黒より㊩と盤る手冗着に等く随つて㊨の抑も急務ではない。

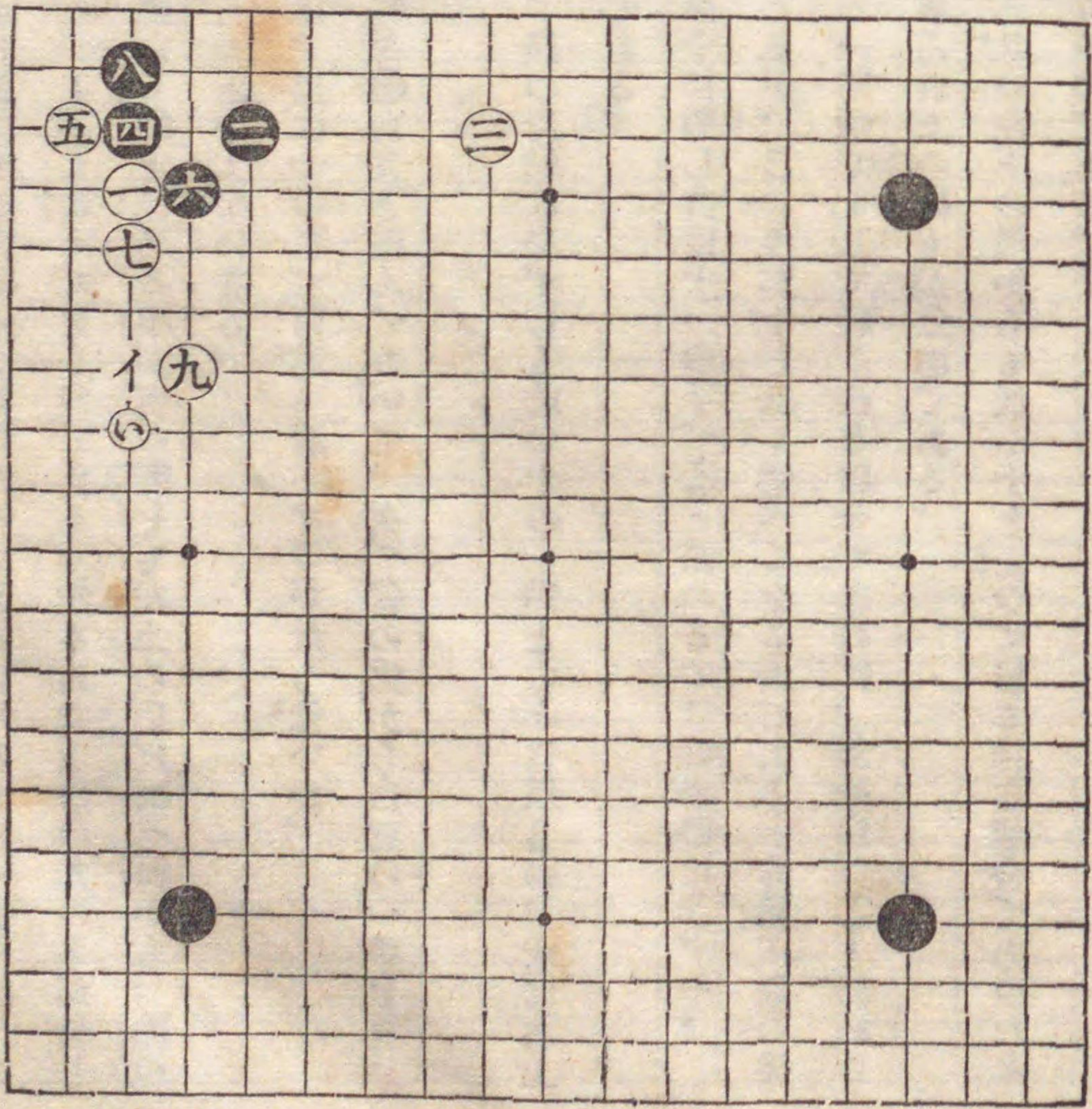


第十五局

黒四の三々頂は確かな手である、三子の置碁としては此く打つのも紛れなくて可い。

△註 従來處々に説いてある通り、二子三子の局では明隅白の先着に對し、黒が掛りを打つた時、白に夾まれるは當然の事である、其の場合、黒の立場としては、互先定石の許す範圍内に於て如何打つても敢て差支はないが(イ)の二間夾返しの手段に出るのが一番判り易いとしてある、然し本圖の如く三々頂に打てば、白から何等の手段の施し様がないから、最も確かな手と言はれるのである。

白九は㊦と二間拓でもよい。(互先定石三間夾三々頂參看)



~~~~~(局子三法石布)~~~~~



白若し九の手を⑨と二間拓したならば、黒は十の大斜走は打たぬのである、此の十の一子には、次  
て⑩と打つて左上の白の裾を覗はうといふ手を含んでをるのである、然るに左上白の九の手が若し  
⑨と低く備へてある様な場合には、黒から⑩と詰める手が何の響をも左上の白に與へぬから、溯つ  
て黒は十の一着からして考へねばならぬといふ事になる。

△問 左上の白が⑨と二間拓した時は、黒は十の手で何處へ着手するが最も佳いか。

○答 然る場合には黒は⑩と押し白⑪黒⑫白九と運んでおいて、次で⑬の點から白三の一手を攻め  
る手段を採るがよい。

但し本圖白九の如き場合にあつても、黒の着點は必ずしも此の十の一點とのみに限らぬ、或は右上  
から⑭と大斜走して⑮のよい手である。

△問 左上白九と高く打つた以上、黒十に對し白は十一の手で⑯と詰めるのは好姿勢に非ずや。

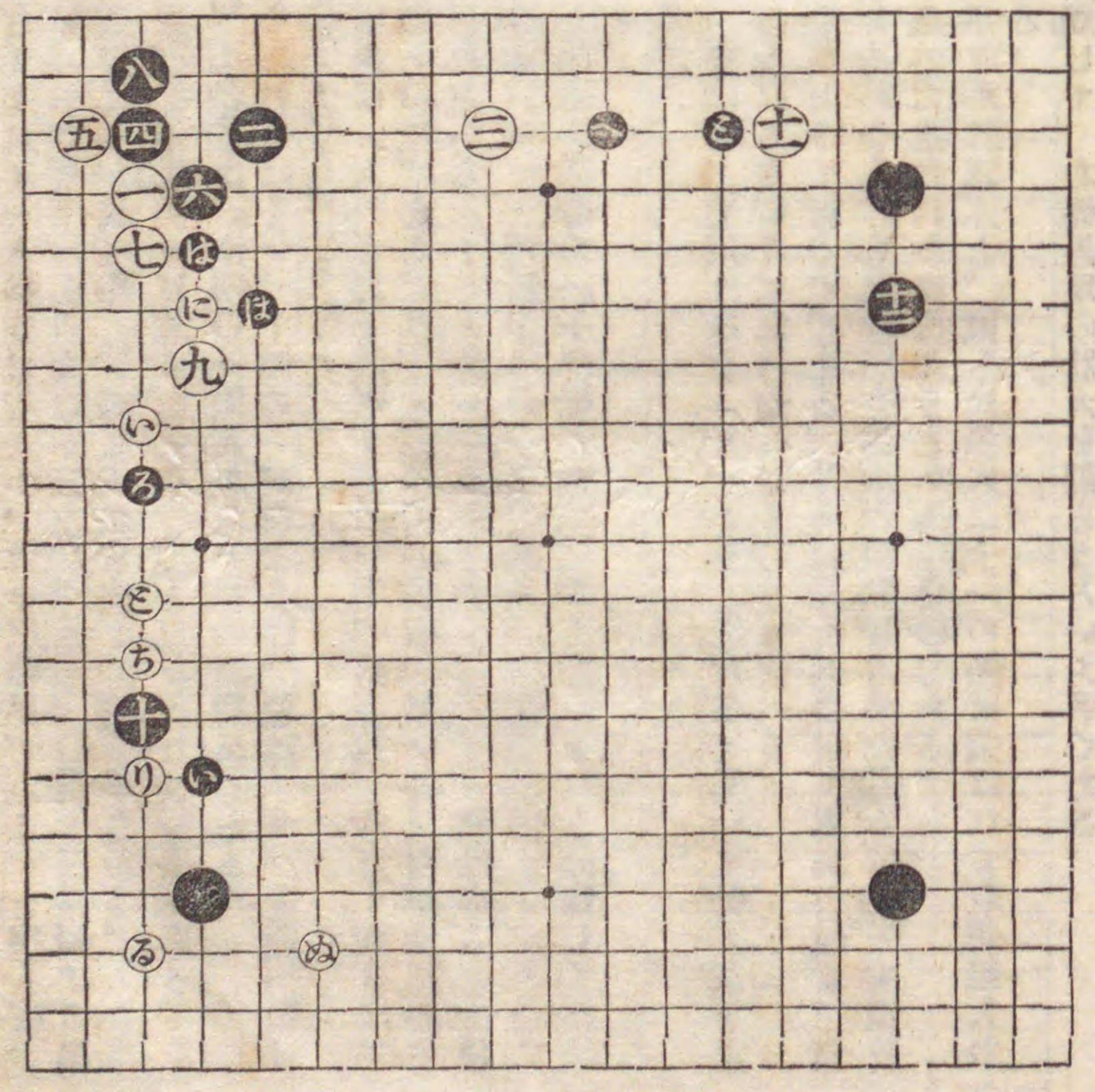
○答 白よりする⑯の詰は好點ではあるが、已に黒が十と低く備へてをる所であるから稍不急の嫌  
ひがある、若し黒十が一路高く⑰と一間飛でもして居る様な場合であれば、無論白は⑱と詰める  
が急務であるが、本圖の場合では寧ろ右上の掛りが急場である。

△註 若しも左上の白が⑲と低く備へ且つ左下の黒からも低く十と走つて居る様な場合であつたな  
らば、此の左側一帯の地は當分中立地帯である。

△問 黒が十の手を此く左下よ  
り走らずして、右上より⑳と  
斜走したならば、白十一は何  
處へ打つ可さか。

○答 其の際は、白は㉑若くは  
㉒或は㉓と左下へ掛るがよ  
い。此の㉒の掛りは黒㉔と飛  
ば㉕と詰めやう若又㉖と飛  
ばず十と斜走したならば㉗と三  
々に打込まうの手である。

△註 黒が十の手で右上を㉘と  
走つた時、白が左下の好點を  
占めて㉙若くは㉚から迫るの  
は少し露骨である、が㉛から  
迫つて黒が㉜と打たば㉝に詰  
めやう、若又黒㉞に飛ばず十  
と走らば㉟と隅の根據を奪は  
うといふ打方は巧妙である。  
黒十二の應手は普通である。



局子三法石布



右下隅に對する白十三の掛りは或は右より(イ)と掛つてもよい、白十三の手で(イ)と掛らば、黒は(ロ)の點に飛ぶか或は十六の點(右側星下)から夾むかの二途である、○白十三に對する黒の應手は此く十四と一間飛するが普通であるが或は●と下側星下から夾んで打つ手もある。

白十三黒●となつた時、白は右下の置石を兩掛かりに攻るか或は(ニ)と三々へ打込む手である。

△註 兩掛にする白の着點は(イ)の小斜走か、十四の一間高か(ハ)の二間高である。

(イ)の小斜走ならば黒は十四と頂手に打てばよい。十四の一間高ならば、黒は(ロ)と左へ頂けるがよい。(ハ)の二間高ならば黒は十四と頂けるがよい。

若し白が(ニ)と三々を犯した時は黒は(ホ)と之を遮斷するの一手である茲で注意すべきは下側星下に●の一子がある時と無い時との差である。星下に黒の●の配石の無い時に白が十三の手から(ニ)と三々を犯さば黒は之を右方から(ト)と抑へやうとも或は(ホ)と遮斷するとも任意であるが●に黒があれば黒は是非共(ホ)と遮斷するの一手である、何となれば(ニ)と十三とを連絡せしめ此の白を堅固ならしめると黒●の一子は働かぬ手になるが(ホ)と遮斷して終へば●は夾の好着點となるからである。

「置碁定石頂手の部參看」

白若し十五の手を十六の點に打たば、黒は●と尖頂け白を(ロ)と重く立たせて置いて●と星下から攻るがよい。白の十五は黒に此く打たれるを嫌うて之に備へたものとも言へる。

溯つて言ふと黒十四の一着は次の手を見合つて居るのである。乃ち白が十五の手で本圖の通り下側に備へれば、圖の如く右側の好位地を占めやう、若又白が右側十六の點を占めたならば●と尖頂け●と攻める急な手を打たうといふ、此の二途孰れかに出やうといふ手なのである。

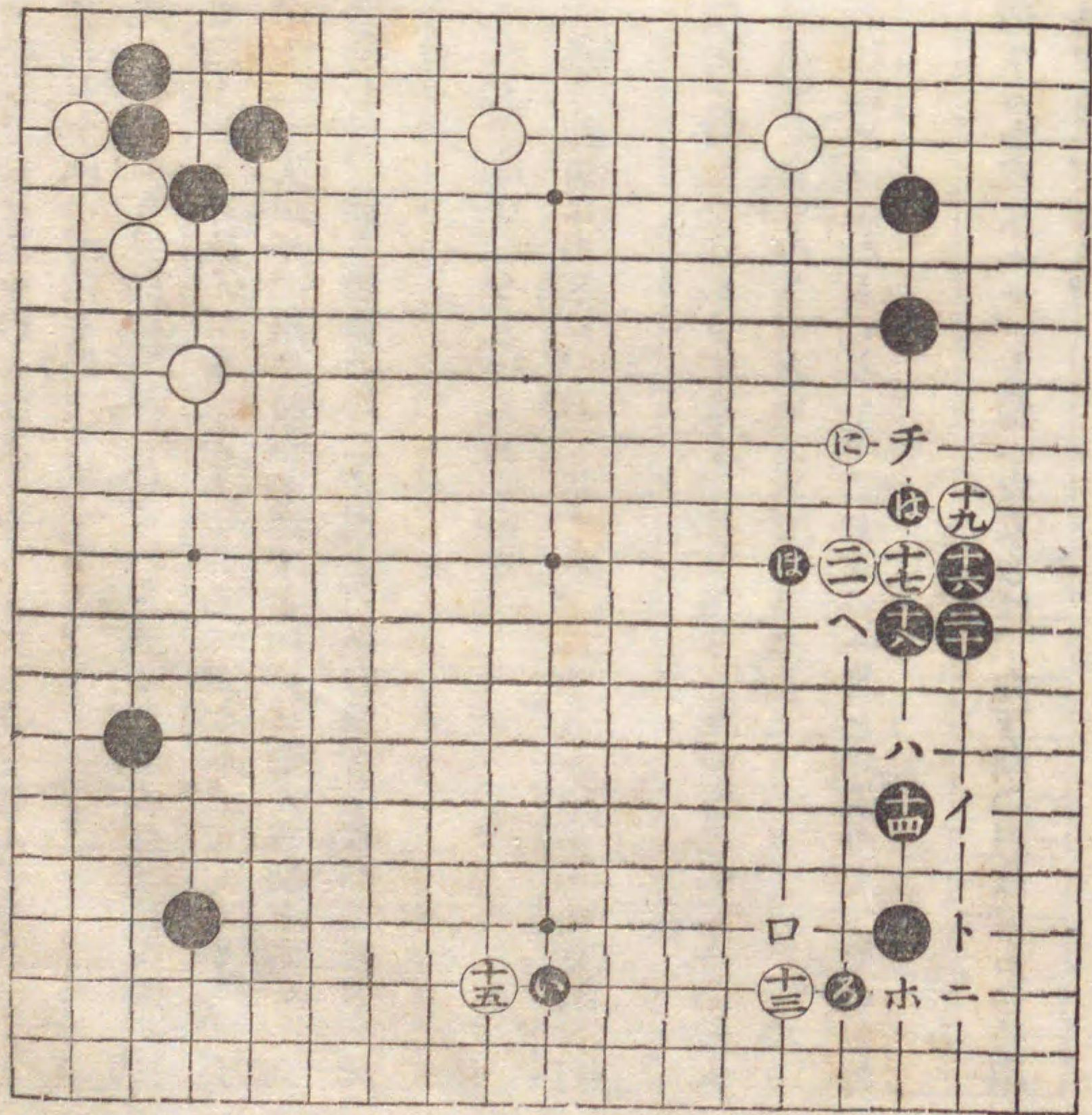
白十七の手は急務である、若し此の手を外に運ぶと、直ちに黒に二十一の點に飛ばれて右側絶大の地域は白より手の着けられぬ事になる。

即ち此の十七の一子は厳しく黒に接觸して、右側黒地の壯大を削らうといふ手である。

黒十八は此く下から、縛ねても或は上から●と縛ねても同じ事である、白は孰れにしても十九の手で十六の一子を抑へつけるのみである。

白に十九と抑へられた時、黒は二十と堅固に粘ぐの外はない。

白二十一●は●の點に堅く粘ぐ手と、●と軽く斜走する手と、本圖の如く行びる手とある、●と堅く粘れば右上へ響くが右下へは影響せぬ、そして黒から●と煽られる手がある、圖の如く二十一と行びれば(へ)と曲る手が利いて右下へは感じるが右上へは響かぬ其と同時に、(へ)の點に押される手がある●の斜走は輕いだけで、上下何れにも感じを與へぬ手である。



~~~~~(局子三法石布)~~~~~


黒二十二は先手で右下隅三々の打込を拒ぎ、次に二十四と斜走しやうといふ意を含んでをる。

黒二十四の斜走は④の曲りを拒ぎ同時に三十四の打込を覗うた手である。

△註 黒二十二の尖頂無くして三十四と打つても、白に振替られて⑤と三々を侵されては得失相償はない、又二十四の斜走を後にして三十四と打込んでも上から△印白の鋒が臨んでをるから、白は然程苦痛を感じない、即ち此の二十二と尖頂け、隅に防禦を施すと同時に白の根據を奪い、次に二十四と打つて△印白の勢力を遮断して、然る後徐ろに三十四と打込む機会を覗つて居る、此の微妙な手順を能く味はねばならぬ。

白二十五の掛粘ぎは自ら缺點を補うて右上に迫まらうといふ意である。

既に二十五の備へが出来た上は右上の黒も油断は出来ぬ、乃て二十六、二十八と頂抑への定石に打つて隅の活を安固にしたのである。

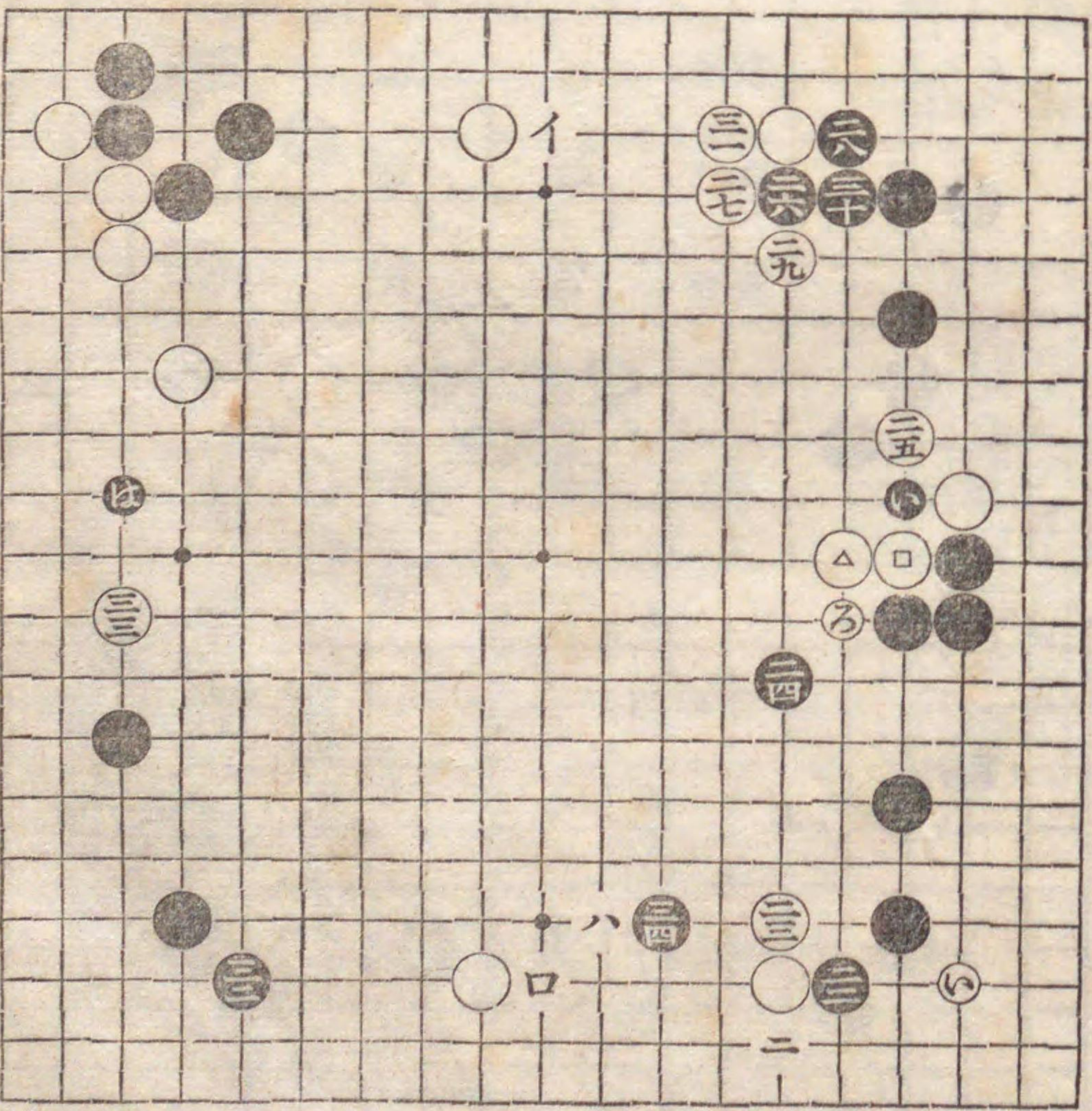
尙黒二十八の頂抑へは單に此の隅の堅固を策したばかりでなく、茲に先手を執つて此の場合の最大點たる左下隅の締り即ち三十二の點に先鞭を着けやう、といふ意である。

且つ此の三十二の一着は單に左下隅の防備たるばかりでなく、二十四の一着と相俟つて下側の白地を威壓しやうといふ手である。

白若し三十三の手で、(ハ)の邊に防備するか或は(ニ)と備へたならば、左下隅の黒は直ちに長驅して左上白の裾明きに向つて●と侵略する手である。

△「追加」(前圖の手順參看)十

七の手即ち本圖□印を打つ前に一應注意を拂つて置かねばならぬのは、上側星下(イ)若くは下側星下(ロ)の邊に黒の布石の有るや否や、といふ點である、若し(イ)の邊に黒の布石があるものと假定すれば、白十七の時黒十八、白十九黒●白二十一、黒二十となつた時の白は(チ)から打つて黒●を征に提る事は出来ぬ。其と同じく下側(ロ)の邊に黒布石があれば、白十七の頂に對して黒は十八の手を上方即ち●の點から繰ねておくからやはり同一説に歸着する、即ち孰れにしても上側若くは下側に黒があれば、白十七の頂は絶對不可能であると定めなければならぬ。

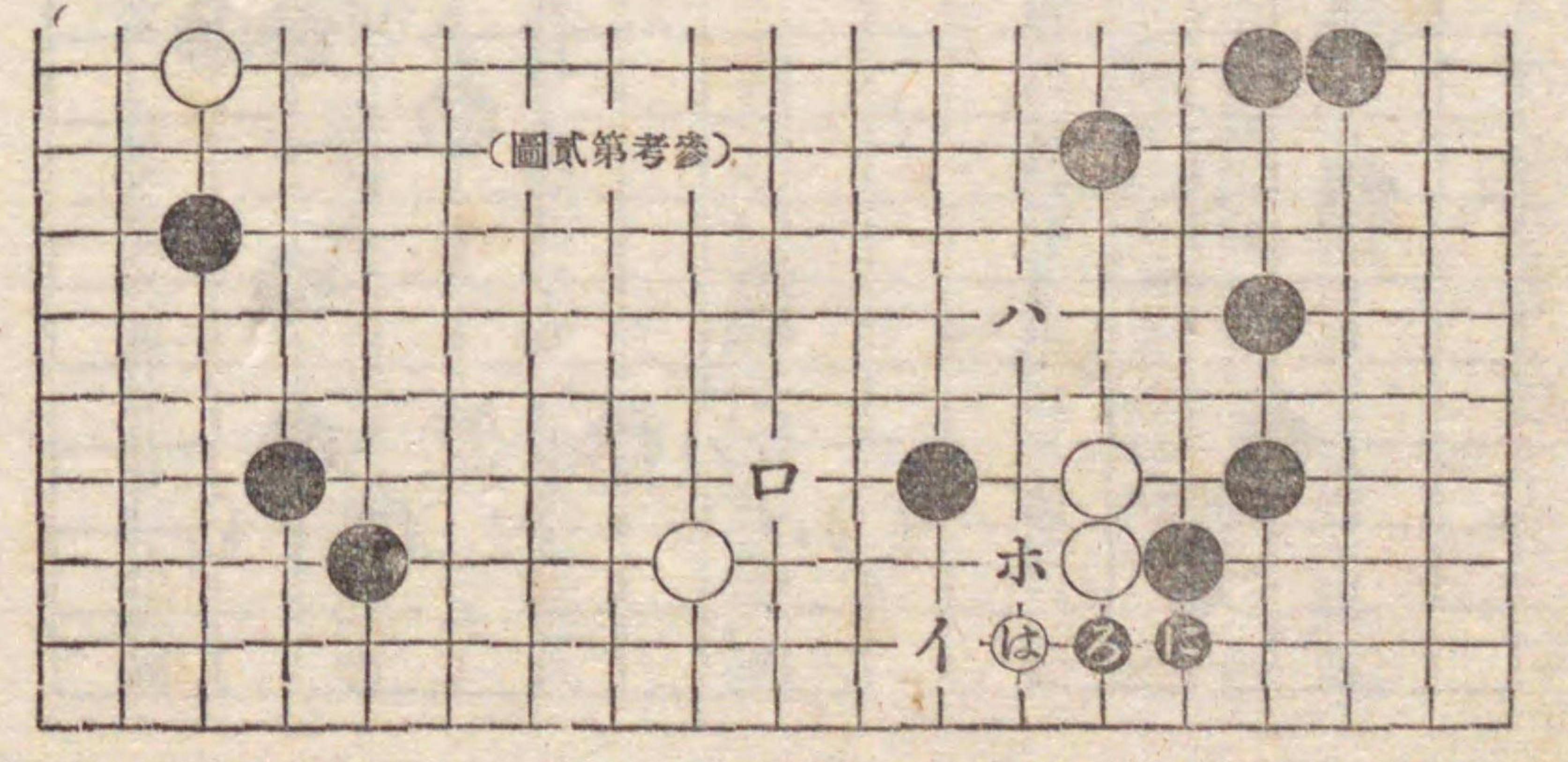
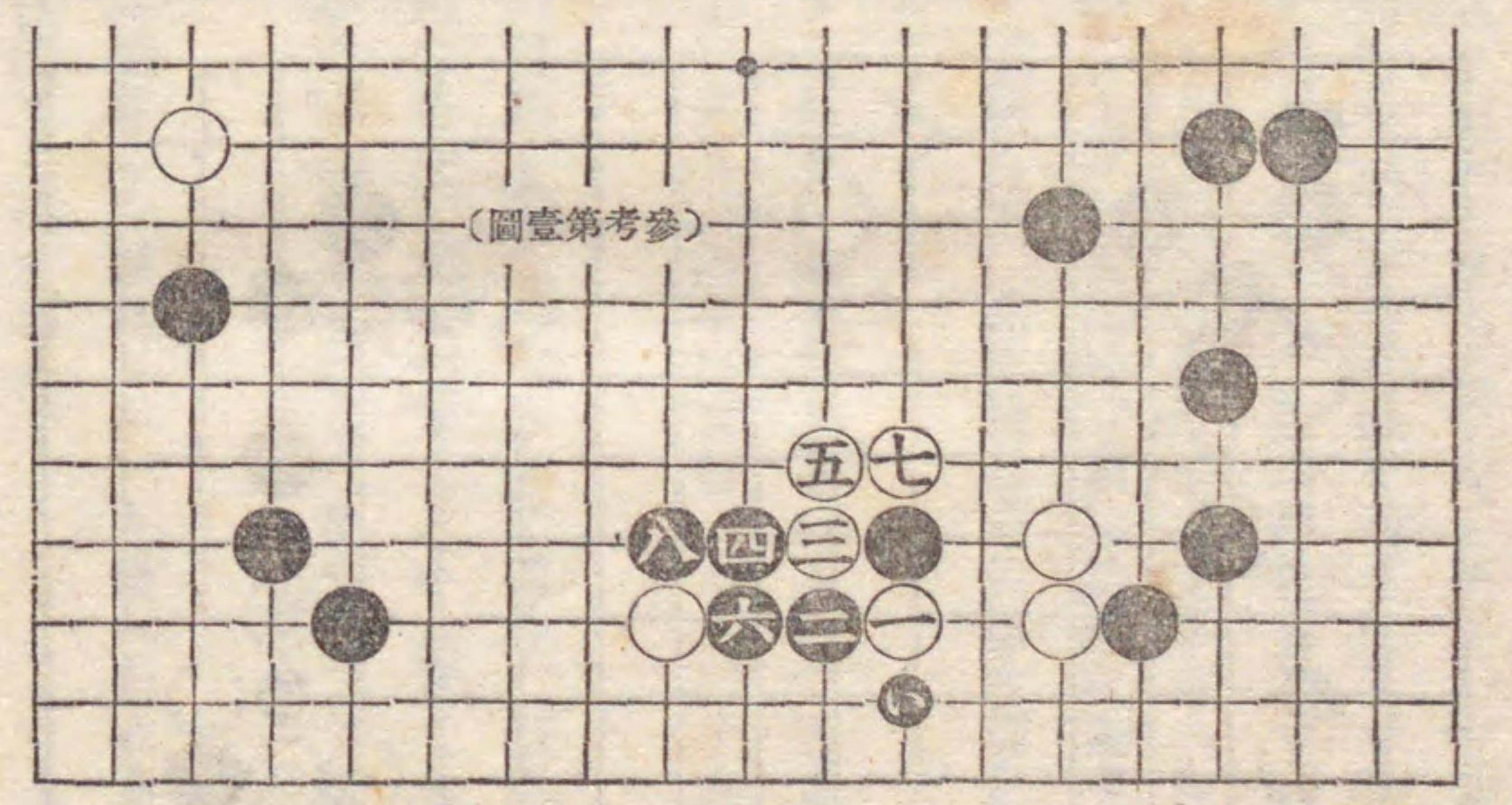


~~~~~(局子三法石布)~~~~~



△(參考第一圖) 前圖黒が三十四と打つた時、白は三十五の手に如何應じてあらうかといふ事を想像して之に處する黒の應接を考へると、白が一と頂けて來た時黒は二と抑へ、白が更に三と截つて來た時、黒は下から四と縛ねて居てもよいが四と縛ね上げ白五、黒六、白七、黒八と振り替つても黒の大利益であるは勿論である。

△(參考第二圖) 白が三十五の手で(ロ)と尖んだならば、黒は(イ)と飛んでおくが巧妙な手である、若又白が(ロ)と尖まず(ハ)と上へ斜走して出たならば、黒は白の肩に向つて(ロ)と飛ぶがよい。萬一白が三十五の手で低く二線に(イ)と打つて來たならば黒は直ちに(イ)と縛ね白(イ)の時(イ)と粘いておくがよい(ホ)の截味は何時迄も白を牽制して居る。



大正五年貳月拾貳日印刷  
大正五年貳月拾五日發行

著作  
所有

編輯者兼 廣 月 凌  
印刷者 高 桑 基 次  
印刷所 株式會社 秀 英 舍

發行所 中央圍棋會  
東京市神田區美土代町四丁目五番地  
(振替貯金口座東京一〇五八九)

布石法二子局三子局(奥付)  
正價金貳圓四拾錢  
郵送料金八錢



